

# 埼玉奥の山・鉄砲山古墳出土埴輪の再検討

城 倉 正 祥

## Reconsideration of Haniwa from Burial Mounds of Okunoyama and Teppoyama in the Sakitama Kofun Cluster

Masayoshi JOKURA

### Abstract

This paper deals with haniwa (clay images) found at two burial mounds, i.e., Okunoyama and Teppoyama, in the Sakitama Kofun Cluster, a National Special Historic Site of Japan, which is located Gyoda city, Saitama prefecture. The author has already established the chronology of haniwa in the Sakitama Kofun Cluster in a paper published in 2011. After the publication, the Saitama Prefectural Board of Education has undertaken continuous excavations at the site. Consequently, they published the excavation reports of Okuteyama in 2014 and Teppoyama in 2018, with figures of the newly found haniwa. Therefore, the present paper conducts additional analyses of the new materials to complement the chronology of haniwa in 2011.

The following results were obtained. First, haniwa from Okunoyama, classified into Groups A and B, originated in the Sakurayama kiln in Higashimatsuyama city and the Oinezuka kiln in Konosu city, respectively. Among them, the provenience of Group A is noteworthy, because it was previously unknown. Second, the present analysis reconfirms that haniwa from Teppoyama is exclusively originated in the Oineduka kiln. According to the identification, analysis of products in the Oinezuka kiln during Periods II–III clarifies that types supplied to the principal burial mounds in the Sakitama Kofun Cluster, i.e., the Futagoyama and Teppoyama, continued to exist across the periods. For instance, Type DE8 occurs from the early Period II to the early Period III, and Type DE5 is from Late Period II to Late Period III. Demonstrably, artisan(s) who produced these types initiatively participated in the continuous production of haniwa in the Oinezuka kiln.

The reconsideration enables to understand the production system of haniwa in the Oinezuka kiln, a major production center, from Periods II to III. Given that excavations in the Sakitama Kofun Cluster continues, our study should be updated with further additional materials.

### はじめに

2020年3月に特別史跡に指定された埼玉古墳群は、古墳時代後期の東国を代表する古墳群である。100m超の3基を含む前方後円墳8基、円墳1基、方墳1基で構成され、5世紀末～7世紀前半にかけて大型古墳が連続と造営された「武蔵国造」の奥津城である。1967年以降の55年以上に及ぶ調査研究史については、埼玉県教育委員会の総括報告書で簡潔に整理されている（埼玉県教育委員会 2018）が、埼玉古墳群の研究の根幹となる編年観については埴輪の分析から整理したことがある（城倉 2011a・2018a・2018b）。しかし、前稿（城倉 2011a・b）の公表後も、埼玉県教育委員会によって、奥の山古墳（埼玉県教育委員会 2014）、鉄砲山古墳（埼玉県教育委員会 2020）、二子山古墳（埼玉県教育委員会 2023）、愛宕山古墳（2023年現在、調査継続中）の

発掘調査が進められており、出土埴輪の量も増加している。現在までの発掘成果を見る限り、2011年段階の埴輪の分類・編年に変更の必要はないと考えているが、「主系列墓」である二子山・鉄砲山古墳出土の円筒埴輪の様相が報告されたことで、供給元である生出塚窯における最盛期の生産の様相を具体的に把握できるようになった。そのため、本論では2011年段階の埼玉古墳群出土埴輪の分類・編年の「補遺」第1弾として、奥の山・鉄砲山古墳出土埴輪を再検討し、生出塚Ⅱ～Ⅲ期（城倉2010a）における生産の具体像に関して考察を加える。なお、二子山古墳出土埴輪の再検討に関しては、「補遺」第2弾として機会を改める予定である。

## 1. 埼玉奥の山・鉄砲山古墳の調査成果と分析の課題・方法

### 1-1 奥の山古墳の発掘成果と出土遺物

奥の山古墳は、1967年に二子山・鉄砲山古墳とともに発掘調査が行われ、1968年に周溝の復原工事が行われた。後円部西側造り出し、前方部両隅角部分には土盛りが行われ、盾形一重の「水濠」に復原された。遺物は、埴輪の破片類が報告されている（埼玉県教育委員会1988）。その後、2007～2009年の3年間、再整備のために発掘調査が行われ、その成果をまとめた報告書が刊行された（埼玉県教育委員会2014）。以下、その成果に基づいて、検出遺構と出土遺物の様相をまとめる（図1）。

発掘調査により確認された前方後円墳の規模は、墳丘長66.4m、後円部径38.4m、くびれ部幅18.8m、前方部幅43.2m、後円部高5.6m、前方部高6.0mを測る。墳丘は二段築成で、テラス面に円筒埴輪列が検出されているが、墳裾近くにも旧表土からなる幅0.8mの緩斜面（報告書では「中段テラス」と記載）が確認されている。後円部西側の造り出しは、前述したように復原工事による盛土と確認されたが、三角形の突出部を中心に須恵器や形象埴輪が出土した。墳丘内の旧表土中からは、榛名山二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）と鑑定された層も確認されている。周溝は台形二重と確定したが、北東に位置する鉄砲山古墳の外溝との前後関係は確定できなかった。最後に埋葬施設は未確認だが、地中レーダー（GPR）探査で確認された後円部墳頂の反応から箱式石棺と推定されている。

土器は造り出しを中心に出土した須恵器が多数を占め、土師器は破片2点だけ報告されている。須恵器は、図3上の装飾付須恵器（子持壺）・高环形器台・壺・坏・高坏・甕が出土しており、産地としては東海西部・東海東部・北関東が想定されている。報告書では、MT15-TK10（古）の瓦塚古墳出土須恵器に後続するTK10型式古相と結論づけている。埴輪は、円筒・人物・馬・家・器財が確認されている。報告書では赤褐色をA類（「低位置突帯」を特徴とする生出塚窯産）、橙褐色をB類（比企産）と呼称している。また、円筒埴輪の突帯扁平率（突帯高を上面幅で割ったもの）がA類では0.41（比企産のB類は0.67）であるとし、同じ生出塚窯産の鉄砲山古墳出土品0.21よりも扁平化が進んでいない点を指摘している。さらに、墳丘上ではA類の出土が圧倒的で、外溝ではA・B類が拮抗する点から、樹立位置に規則性があった可能性も指摘している。

### 1-2 鉄砲山古墳の発掘成果と出土遺物

鉄砲山古墳は、1968年（未報告）、1979・1983年（埼玉県教育委員会1985）に発掘調査が行われている。その後、2008～2016年の9年間、再度、発掘調査が実施され、その成果をまとめた報告書が刊行された（埼玉県教育委員会2020）。以下、最新の成果に基づいて整理する（図2）。

発掘調査により確認された前方後円墳の規模は、墳丘長107.6m、後円部径（推定）49.7m、前方部幅68.1m、後円部高8.5m、前方部高9.5mを測る。墳丘は二段築成で、幅2.6～3mのテラス（報告書では「中段テラス」）の外側（下端）に円筒埴輪列が確認された。一方、墳裾部分では旧表土を掘り込んで周溝を掘削した後に、裾部に再度、盛土をして平坦面（報告書では「下段テラス」）を造成しており、後円部東裾部の平坦面では土師器の高坏などが置かれていたという<sup>(1)</sup>。前方部西側のくびれ部寄りでは、造り出しを検出してい

(1) 報告書では、墳丘を二段築成としているが、上段斜面・中段テラス・中段斜面・下段テラス・墳裾と三段を想定する呼称を用いている（埼玉県教育委員会2018 p.266）。墳裾に付加された緩斜面は、奥の山古墳でも確認されているため、埼玉古墳群の前方後円墳に見られる特徴の可能性もあるが、墳丘形式としては二段築成である点は明らかなので、本論では、墳頂・上段斜面・テラス・下段斜面・墳裾（緩斜面・平坦面を含む）・周溝と呼称しておく。

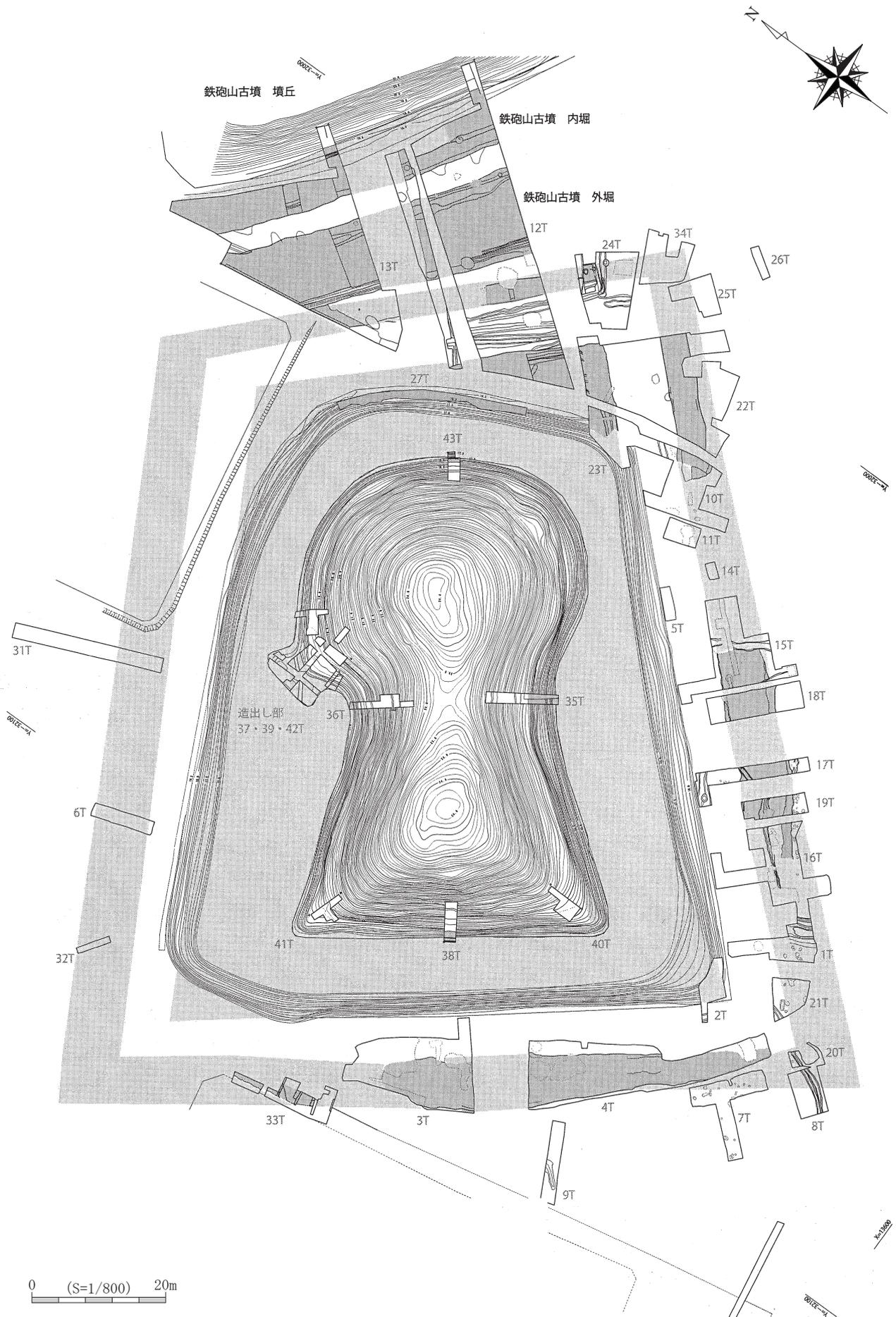


図1 奥の山古墳の発掘調査成果 (埼玉県教育委員会 2018)

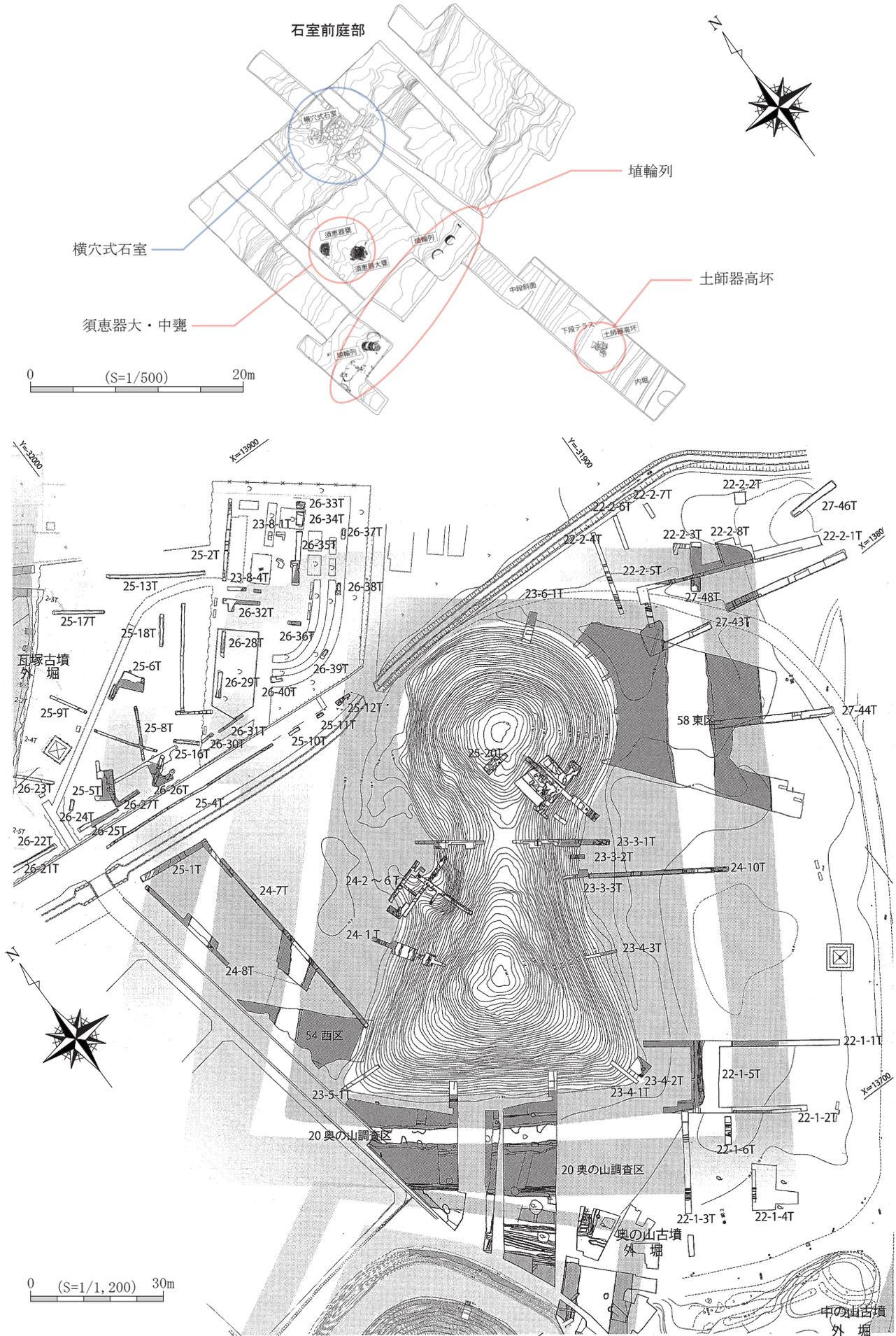


図2 鉄砲山古墳の発掘調査成果 (埼玉県教育委員会 2018・2020)

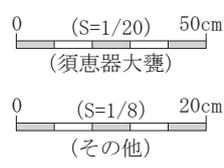
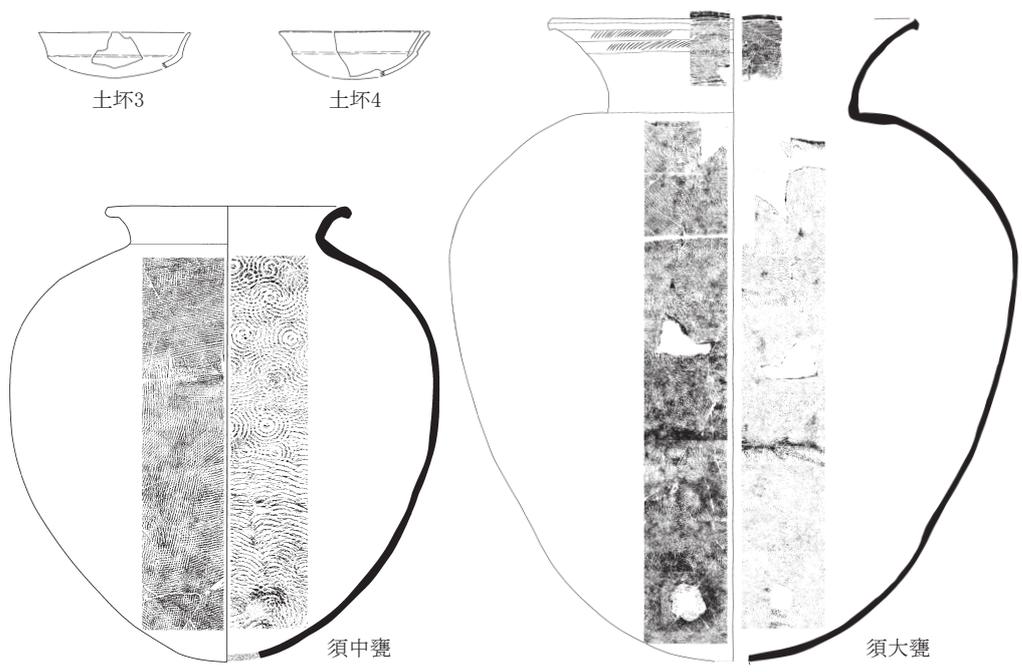
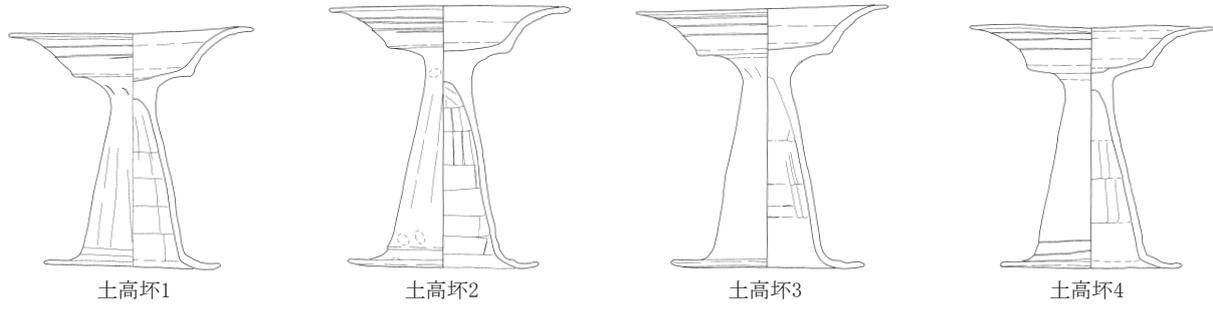
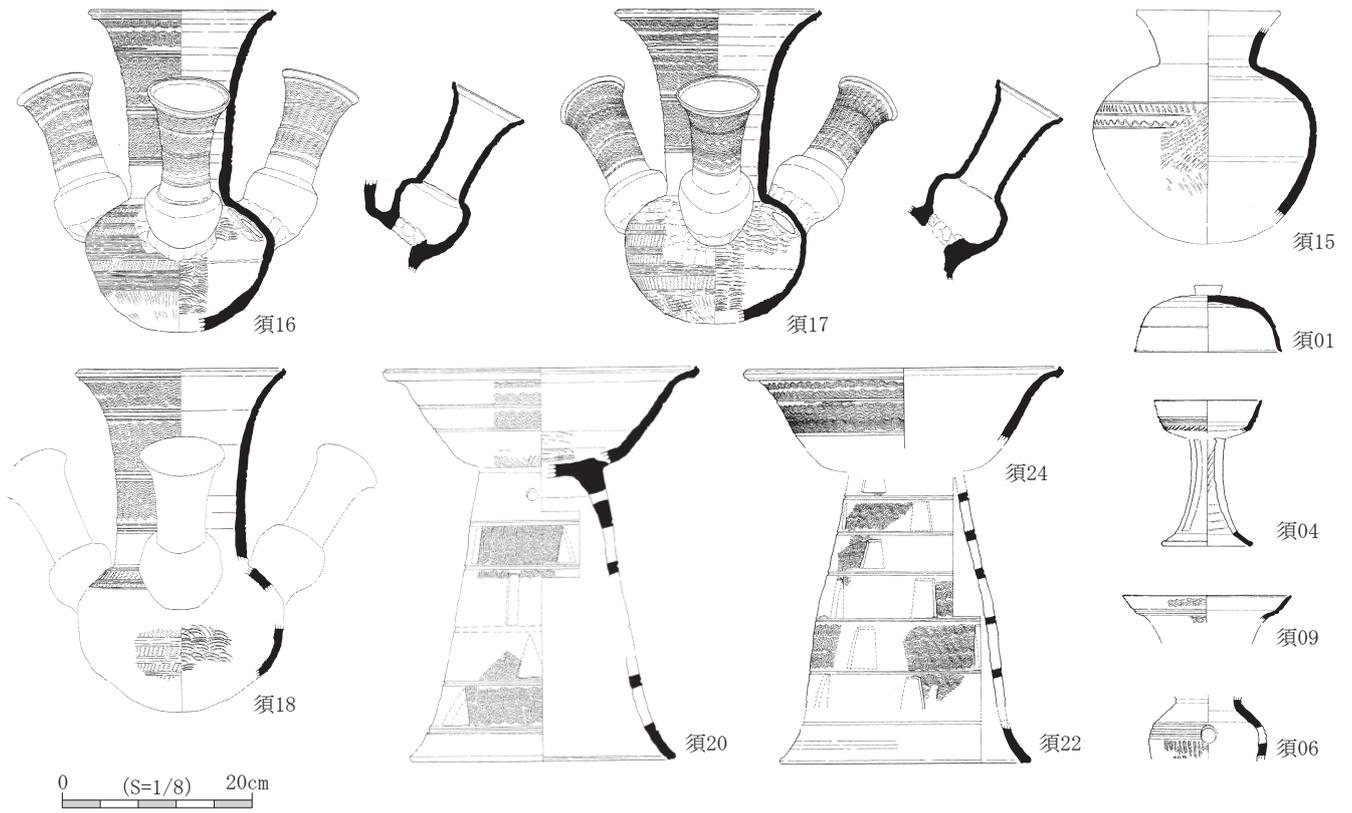


図3 奥の山古墳（上）と鉄砲山古墳（下）出土の須恵器・土師器

る。墳丘内の旧表土下より、榛名山二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) と鑑定された層も確認されている。周溝は台形の二重周溝で、西側の一部では三重の可能性も指摘されている。埋葬施設は、後円部南側くびれ部付近のテラスに開口する横穴式石室で、羨道側壁には角閃石安山岩、天井石には緑泥片岩を使用していた。

出土土器は、須恵器と土師器が確認されている (図3下)。須恵器は陶邑産とされる TK43 型式の大甕・中甕が、石室前庭部に置かれていた (図2上)。土師器についても前庭部周辺に集中しており、特に祭祀用で大型の須恵器模倣長脚高坏は、石室延長上の墳裾緩斜面で7個体が伏せ置かれた状態で出土している。埴輪は、円筒・人物・馬・家・器財が確認されているが、人物埴輪はIV区に集中しており、西側の中堤造り出しに樹立されていた可能性が指摘されている。円筒埴輪に関しては、報告書で76個体の実測図が掲載されており、うち21個体の刷毛目が同定できず、その他は TP1・DE16 (8個体)、TP2 (4個体)、TP3・DE5 (28個体)、TP4・DE8 (9個体)、TP5・DE31 (2個体)、TP6・DE13 (3個体)、TP7・DE44 (1個体) に該当する点が指摘されている。出土した円筒埴輪は、5・6・7・9条の大型品で大多数は生出塚窯産と推定されている。

### 1-3 研究の現状と分析課題・方法

2011年以降に報告書が刊行された奥の山古墳 (埼玉県教育委員会 2014)、鉄砲山古墳 (埼玉県教育委員会 2018) の調査成果を整理した。墳丘・周溝・埋葬施設に関する情報が蓄積されると同時に、土師器・須恵器など編年の基礎資料が着実に増加している点が注目できる。埼玉古墳群に関しては、生出塚窯産埴輪を刷毛目の同定作業によって特定し、窯の切り合い関係から確立した編年観 (稲荷山古墳→丸墓山古墳→天祥寺裏古墳→二子山古墳→瓦塚古墳→奥の山古墳→愛宕山古墳→將軍山古墳→鉄砲山古墳→中の山古墳) (城倉 2011a) が、新しい発掘調査の成果を踏まえて検証されつつある。前稿 (城倉 2011a・b) の編年では、①丸墓山古墳→二子山古墳、②將軍山古墳→鉄砲山古墳の前後関係が、研究史上の位置付けとは異なる部分だった。そのうち、②に関しては鉄砲山古墳の発掘調査で角閃石安山岩・緑泥片岩を用いた横穴式石室が検出されるとともに、埴輪・須恵器・土師器が比較的多く出土したこともあり、前稿の編年の位置付けが受け入れられるようになっている (埼玉県教育委員会 2018 p.275 など)。一方で、①の前後関係については、未だに根強い批判があるため、以下で論点を整理しておく。

丸墓山古墳と二子山古墳の前後関係については、二子山古墳の周溝埋土に「FAと思われる土層」が確認できる点を根拠として、二子山古墳→丸墓山古墳の順序を考える説が提起された (田中 1994・坂本 1996)。生出塚窯産埴輪の分析から丸墓山古墳→二子山古墳の順序を指摘した前稿 (城倉 2011a・b) に対しても、「FA火山灰層は動かしがたい事実であることから、城倉案に方法論的な問題はないのか、再考の余地を残している」 (加部 2013) との批判を受けた。近年に至っても「FAと思われる土層」を根拠に、二子山古墳の築造年代を5世紀末、初葬を6世紀初頭とする若松良一から、再度、批判を受けている (若松 2021 p.33)。埼玉古墳群における「FAと思われる土層」の問題点は2011年段階で整理していた (城倉 2011c pp.137-139) が、早稲田大学が2017年度に実施した二子山古墳の地中レーダー (GPR) 探査でも、後円部南側斜面に横穴式石室の可能性が高い反応を確認しており (城倉ほか 2018・城倉編 2023)、FA降下前の5世紀末の築造と考えることは難しい点を指摘してきた。さらに、同じ2017年度に実施された二子山古墳造り出しの調査で出土した須恵器も TK10 型式古相とされ (中井 2019)、直近で刊行された発掘報告書でも、墳丘盛土直下で榛名山二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) の可能性が高い層が確認されている (埼玉県教育委員会 2023 pp.197-210)。つまり、FAの存在を根拠に二子山古墳を5世紀に遡らせる説は、既に成立し難い状況ではあるが、丸墓山古墳の方が新しいと考える説 (加部・若松説) が、成立する余地がなくなったわけではない。丸墓山古墳の編年観に関しては、稲荷山古墳と同じ「三稜突帯」円筒埴輪の存在から稲荷山古墳→丸墓山古墳→二子山古墳の順序を想定した杉崎茂樹・増田逸朗の指摘 (杉崎 1988・増田 2002a) が妥当と考えている。前稿 (城倉 2011a・b) では、この類型を「雷電山復古型」と呼称したが、この点に関しても雷電山古墳 (埼玉県県史編纂室 1986) の系譜を引くと思われる「三稜突帯」円筒埴輪を、柵・家などの形象埴輪であるとし、その「価値」を評価しない立場 (若松 2021 pp.33) から批判を受けている。丸墓山古墳に関しては、今後の発掘調査の進展を期待したいと思うが、2019年度に早稲田大学が実施した測量・GPR調査では、横穴式石室ではなく、竪穴系埋葬施設の可能性が極

めて高い点を確認しており、その成果も踏まえて年代を論じていきたいと考えている。

ここまで論点を整理したように、発掘調査の進展によって、前稿（城倉 2011a・b）の編年観が確認されつつあるものの、特に古い時期（稲荷山・丸墓山・二子山古墳）の位置付けに関しては、更なる検討が必要である。今後も埼玉県教育委員会と連携しつつ、古墳の測量・GPR 非破壊調査（城倉編 2022・2023 など）を進めると同時に、進展する発掘調査を踏まえて遺物の調査研究を継続し、埼玉古墳群の編年と歴史的な位置付けに関する精度を上げていく予定である。

以上、新しい発掘による資料の増加によって、埼玉古墳群の埴輪編年を多角的に検証する作業が進んでいる点が重要である。また、埴輪生産の研究という視点でいえば、近年の資料増加によって生出塚窯における生産プロジェクトの様相が具体的に把握できるようになった点が注目できる。特に、従来は破片資料が中心で全形が把握できる資料が存在しなかった埼玉古墳群の主系列墓：鉄砲山古墳で、5・6・7・9 条の大型円筒埴輪が多く出土した点は非常に重要な成果といえる。生出塚編年のⅢ期（城倉 2010a）開始の画期となった鉄砲山古墳の埴輪生産は、東京湾岸まで達する遠距離供給の契機ともなった大規模プロジェクトである。鉄砲山古墳の大型円筒埴輪で主体を占める TP3（DE5B）類は、生出塚 A 地点 15 号窯で検出された著名な 3 体の双脚人物（DE5C 類）と同じ刷毛目で、この人物も鉄砲山古墳への供給を目的として製作されたと考えている（城倉 2011b p.11）。この DE5 類の刷毛目に関しては、神奈川県横浜市の北門 1 号墳（滝澤 2007）に供給された表現が崩れた双脚人物（DE5C' 類）にも見られ、生出塚窯での存在時間幅が長い点を想定していたが、近年では、小橋健司・山崎武などもその存在に注目しており（小橋 2021・山崎 2021）、山倉 1 号墳の埴輪の分析で指摘された「エース工人体制」（小橋 2004）など重要な現象を考える際に示唆的な事例といえる。さらに、前稿（城倉 2011a・b）では、破片資料 2 点でしか確認できなかったため、明確な位置付けが出来なかった TP4（DE8）類が、鉄砲山古墳の発掘において一定量出土した点も非常に重要だと考える。TP4（DE8）類は、生出塚編年Ⅱ期開始の画期となった二子山・瓦塚古墳で認められる類型で、Ⅱ～Ⅲ期への連鎖が把握できる資料である<sup>(2)</sup>。

このように、鉄砲山古墳の埴輪資料が増加したことによって、生出塚窯における最盛期の埴輪生産の様相に関する多くの情報が蓄積されることになった。以上を踏まえて、2020 年 10 月 5～7 日（3 日間）に鉄砲山古墳の埴輪、同 10 月 27～28 日（2 日間）に奥の山古墳の埴輪、それぞれ新出資料を中心に資料調査を実施した。また、関連資料として 2023 年 1 月 26 日に大境 6 号墳出土武人（熊谷市教育委員会編 2015 第 158 図 7 の個体）の調査も実施した。分析方法としては、前稿（城倉 2011a・b）で設定した「刷毛目共通類型」の抽出を基本とし、埴輪の群別・類別を行った（大境 6 号墳出土武人のみは三次元計測も実施した）。本論では、その成果に基づいて、奥の山・鉄砲山両古墳出土埴輪の分類成果を示すとともに、生出塚窯産埴輪の特定類型に注目し、生出塚Ⅱ～Ⅲ期における大型古墳への供給プロジェクトの様相を整理する。

## 2. 奥の山古墳出土埴輪の分類

### 2-1 前稿での分類成果

まず、前稿（城倉 2011a・b）での分類について、簡単に整理しておく。

2011 年段階で刊行されていた奥の山古墳の報告書（埼玉県教育委員会 1988）で掲載されている埴輪は、ほとんどが破片資料で全形が判明する資料は存在しなかった。そのため、破片資料の分析が中心ではあるが、比企地域で生産された可能性が高い橙褐色の埴輪を A 群、生出塚窯産と判明している埴輪を B 群として大別した<sup>(3)</sup>。A 群は二子山 B 群・瓦塚 B 群の系譜を引く比企周辺で生産された埴輪と推定したが、家・人物など形象埴輪の破片が多く、円筒埴輪もわずかに数点の破片のみで全体像を把握することはできなかった。一方、B 群

(2) 生出塚窯産埴輪の編年に関しては、山崎武によるⅠ～Ⅳ期編年がある（山崎 2004）。しかし、本論では円筒埴輪のⅠ～Ⅲ期編年（前後半を含むので合計 6 段階）（城倉 2010a）を採用する。なお、生出塚窯産埴輪を含む複数系統の埴輪で構成される埼玉古墳群出土埴輪に関しては、別にⅠ～Ⅳ期編年を提示している（城倉 2011a）。前者を「生出塚編年」、後者を「埼玉編年」と呼称している。

(3) 埼玉県教育委員会が 2014 年に刊行した報告書では、前稿（城倉 2011a・b）に基づいて分類しているが、A 群を B 類、B 群を A 類と逆に呼称している。

も破片資料が中心だが、OY2（生出塚 DE13）類・OY4（生出塚 DE19）類・OY5（生出塚 DE12）類・OY6（生出塚 DE6）類の刷毛目が確認でき、生出塚窯出土埴輪の存在から、いずれも第1段の短い4条5段の円筒埴輪である点が予想できた。生出塚遺跡の窯体内から出土したこれらの類型を見ると、北支台C群の19・23・21号窯、あるいは隣接して存在する単独窯の24号窯で焼成されたと思われ、いずれもⅡ期後半に位置付けられる<sup>(4)</sup>。中型品の系列としては、Ⅰ期後半の天祥寺裏古墳TS1（生出塚 W4）類・TS2（生出塚 W1）類の第1段が短い4条5段からのスムーズな変遷が追える資料で、Ⅱ期前半の二子山・瓦塚古墳に後続し、21・22号窯で一括焼成された愛宕山・将軍山古墳の直前に位置付けられる一群と考えた。

## 2-2 新出資料を踏まえた分類成果

奥の山古墳の報告書（埼玉県教育委員会 2014）に掲載されている埴輪の分析成果については、表1・図5にまとめた。なお、刷毛目の同定に関しては、図4上段に示した。

今回は円筒埴輪を中心に分析を行ったが、A群（比企系）、B群（生出塚窯産）に分類できる点は、前稿から変更はない。まず、A群は橙褐色の胎土を基本とし、赤（褐）色を基本とする生出塚窯産埴輪とは明確に区別できる。前稿（城倉 2011a・b）段階では、A群は破片のみしか存在しなかったため、全形を把握することが難しかったものの、今回、ある程度形が把握できる資料が複数報告された。条・段数は不明だが、直径からすると3～4条の中型品の可能性が高い。表1にあるように、確認できる刷毛目は基本的にすべてOY7類である。OY7類に関しては、2011年段階では破片が中心だったため、確定することが出来なかったが、資料の増加によって東松山市の桜山埴輪窯（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982）のA類（城倉 2010b）と合致する点が判明した。重要な供給関係を示す資料であるため、立面形状も含めて慎重に検討したが、パターンは完全に一致している（図4上段の右下）。従来から奥の山古墳A群は比企周辺での生産を想定してきたが、OY7（桜山A）類の存在によって、桜山窯の中・大型品が供給された点が確定したことになり、非常に大きな成果といえる。

ここで、埼玉古墳群の橙褐色系の埴輪について、整理しておく。埼玉古墳群に継続的に供給された橙褐色系の埴輪は、比企・大里周辺の窯跡で製作されたと想定できる。稲荷山・丸墓山古墳段階までは比企地域が埼玉古墳群への埴輪供給の中心地だったと思われるが、二子山古墳の生産を画期として生出塚窯でⅡ期の大規模生産が開始され「拠点生産地」になると、比企地域の窯は「衛星生産地」として普段は中小規模の周辺古墳へ埴輪を供給し、埼玉古墳群の造営に際してのみ中・大型品を生産して供給を行うようになった（城倉 2010b）。例えば、生出塚Ⅱ期前半に該当する二子山古墳では、桜山窯の9号窯で焼台として使用されていた方形透孔の大型円筒埴輪と一致する刷毛目（FT4・桜山G類）の個体（5-22-1）を確認している。FT4（桜山G）類で調整された大型円筒埴輪は、比企の諏訪山7号周溝（伝田ほか 2011）、富田後D3号墳（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011）、毛塚32号墳埴輪棺（東松山市教育委員会 2003・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006）でも確認できる。また、比企の毛塚28号墳から出土した女子人物（C2類）は、瓦塚古墳の人物（4-212）とも刷毛目（KZ3・毛塚28C類）が一致する（城倉 2010b）<sup>(5)</sup>。すなわち、生出塚Ⅱ期前半の埴輪が供給された二子山・瓦塚古墳では、桜山窯で確実に生産された個体は確認できず、窯内の焼台として再利用された埴輪の刷毛目が一致する点から、桜山窯を遡る段階の埴輪群＝「プレ桜山」（城倉 2010b）と位置付けていた。その位置付けは、生出塚Ⅱ期後半の埴輪が供給された奥の山古墳で、桜山窯の主体的な類型（OY7・桜山A類）が供給されていた点を確認したことによって裏付けられたことになる。比企系の埴輪の意義については、既に整理しているが、人物・馬・家などの形象埴輪、および円筒埴輪でもかなり特徴的な一群であり、6世紀前半を中心に生産

(4) DE6・19類は、Ⅲ期後半の20号窯でも確認されており、時期が2段階ずれる。しかし、古い埴輪を焼台として再利用する現象は生産窯では頻繁に認められるため、注意が必要である。年代に関しては、当該類型が集中して確認できる窯・古墳の事例から総合的に位置付けるべきで、この場合は窯体内からの出土が集中するⅡ期後半が奥の山古墳の埴輪が生産された時期と考える。

(5) 毛塚28号墳の女子人物（28-2）、瓦塚古墳の女子人物（4-212）と共通する埴輪は、近年ではふじみ野市ハケ遺跡1号墳（ふじみ野市立大井郷土資料館 2020）でも確認されている。

埼玉奥の山・鉄砲山古墳出土土輪の再検討

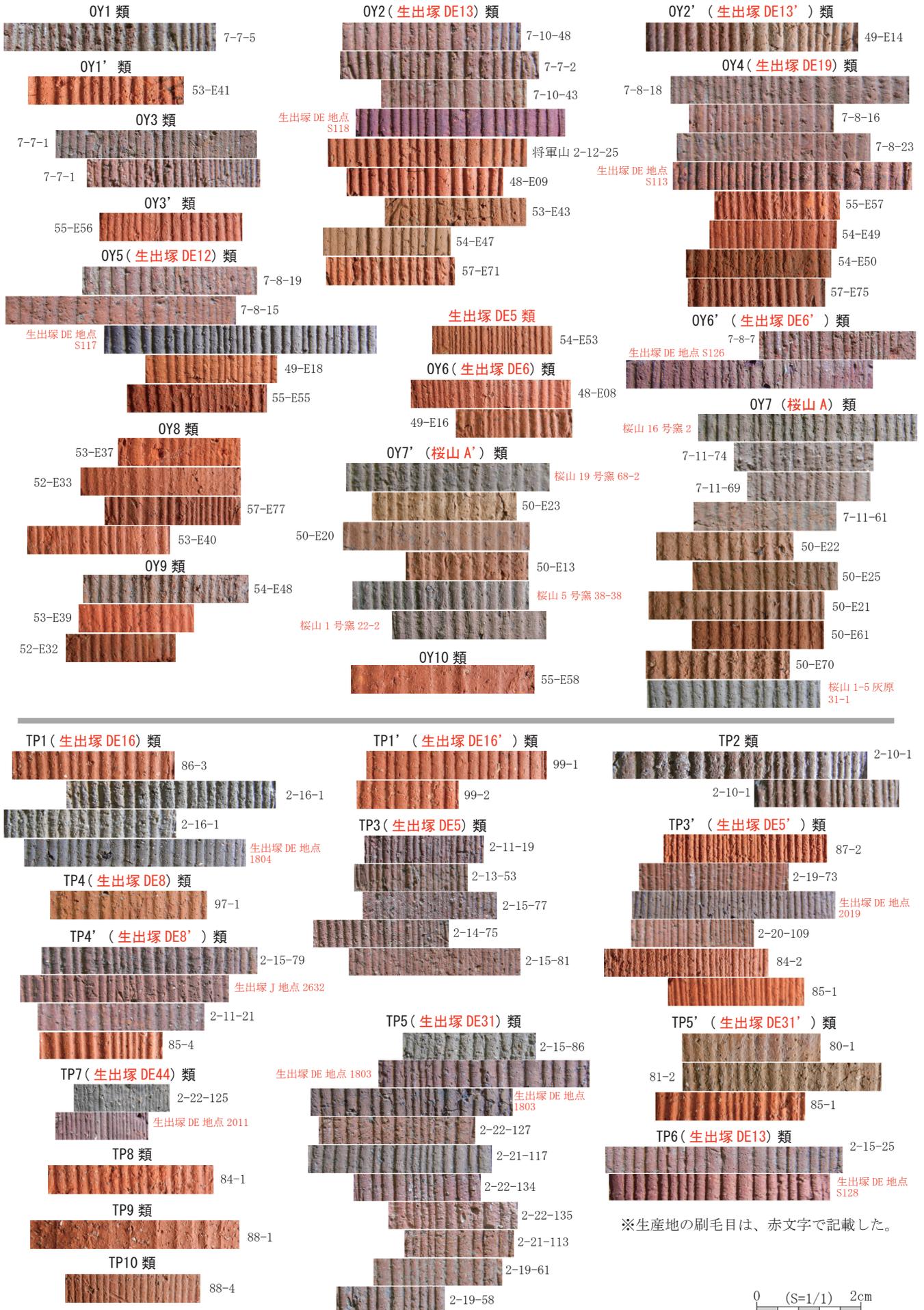


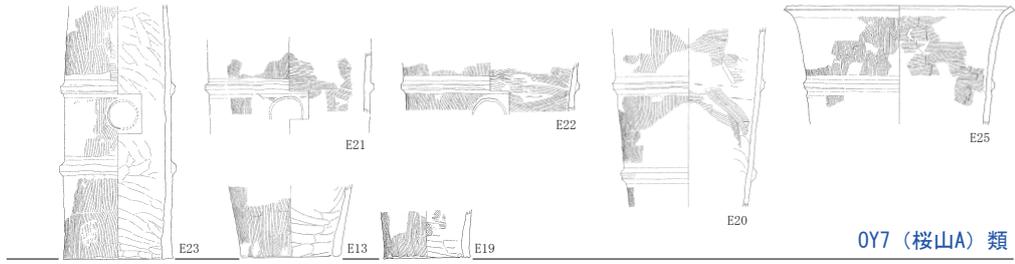
図4 奥の山古墳(上)・鉄砲山古墳(下)出土土輪の刷毛目

表 1 奥の山古墳における新出資料（埼玉県教育委員会 2014）の諸属性

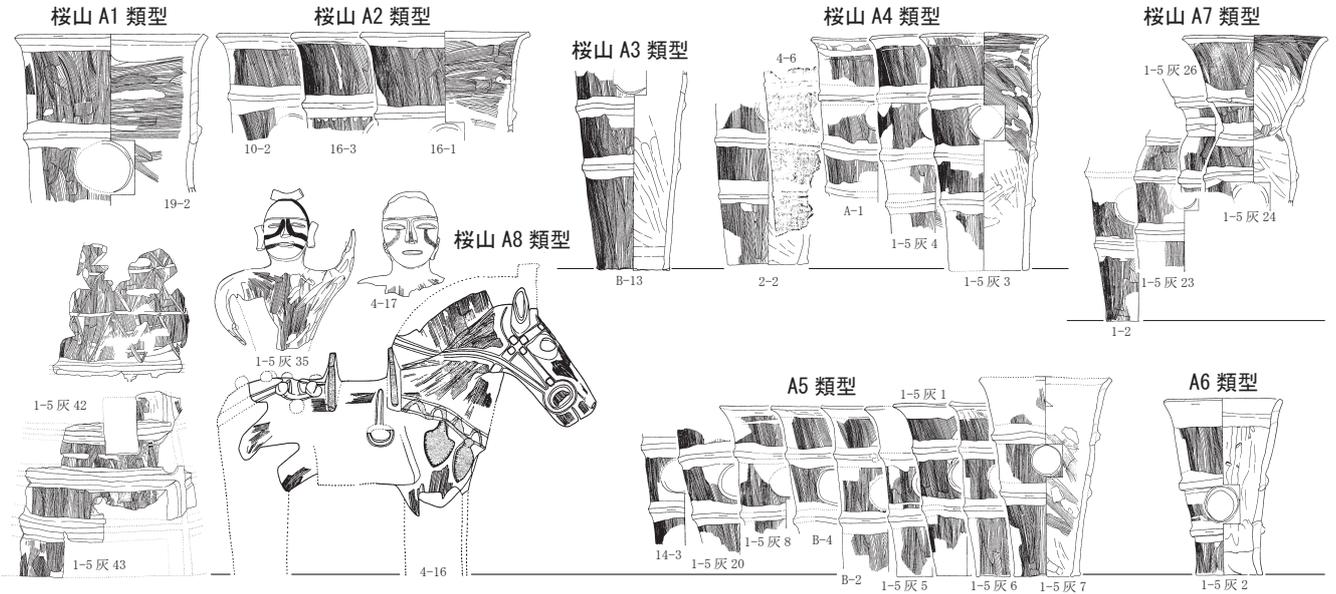
| 個体番号   | 刷毛目（類別） |        | 土色帖         | 色調   | 器種・条数 | 群別  | 備考                                  |                        |
|--------|---------|--------|-------------|------|-------|---|-------------------------------------|------------------------|
|        | 古墳      | 生産窯    |             |      |       |   |                                     |                        |
| 52-E29 | OY1     | 未確認    | 10R5/8      | 赤    | 円筒    | B<br>(生出塚)  | OY1は、生出塚との一致を確認できていない。              |                        |
| 53-E41 | OY1'    |        | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  |       |   |                                     |                        |
| 48-E02 | OY2     |        | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  |       |   |                                     |                        |
| 48-E09 | OY2     |        | Hue2.5YR4/8 | 赤褐   |       |   |                                     |                        |
| 49-E14 | OY2'    | DE13'  | Hue7.5YR7/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 52-E34 | OY2     | DE13   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 52-E36 | OY2     | DE13   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 53-E43 | OY2     | DE13   | Hue5YR6/6   | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 54-E47 | OY2     | DE13   | Hue5YR6/6   | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 55-E54 | OY2     | DE13   | Hue2.5YR6/8 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 57-E71 | OY2     | DE13   | Hue2.5YR6/8 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 57-E72 | OY2     | DE13   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 57-E76 | OY2     | DE13   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 55-E56 | OY3'    | 未確認    | Hue10R4/8   | 赤    |       |   |                                     | OY3は、生出塚との一致を確認できていない。 |
| 53-E42 | OY4     | DE19   | Hue2.5YR5/8 | 赤褐   |       |   |                                     | OY4は、生出塚DE19と合致する。     |
| 54-E49 | OY4     | DE19   | Hue2.5YR6/8 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 54-E50 | OY4     | DE19   | Hue2.5YR6/8 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 55-E57 | OY4     | DE19   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 57-E75 | OY4     | DE19   | Hue10R4/8   | 赤    |       |   |                                     | OY5は、生出塚DE12と合致する。     |
| 49-E18 | OY5     | DE12   | Hue2.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E62 | OY5     | DE12   | Hue10R4/6   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 55-E55 | OY5     | DE12   | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     | OY6は、生出塚DE6と合致する。      |
| 48-E08 | OY6     | DE6    | Hue10R5/6   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 49-E16 | OY6     | DE6    | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     | OY8は、新規確認。生出塚と一致確認できず。 |
| 51-E27 | OY6     | DE6    | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  |       |   |                                     |                        |
| 53-E44 | OY6     | DE6    | Hue2.5YR6/8 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 52-E33 | OY8     | 未確認    | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 53-E37 | OY8     |        | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 53-E40 | OY8     |        | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 57-E77 | OY8     |        | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 54-E48 | OY9     | 未確認    | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  |       | OY9は、新規確認。生出塚と一致確認できず。                            |                                     |                        |
| 53-E39 | OY9     |        | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 52-E32 | OY9     |        | Hue10R5/8   | 赤    |       |   |                                     |                        |
| 55-E58 | OY10    | 未確認    | Hue10R5/6   | 赤    |       | OY10は、新規確認。生出塚と一致確認できず。<br>DE5は、鉄砲山古墳から流れ込みか。1個体。 |                                     |                        |
| 54-E53 | —       | DE5    | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  |       |   |                                     |                        |
| 49-E13 | OY7・7'  | 桜山A・A' | Hue7.5YR6/6 | 橙    | 円筒    | A<br>(桜山)   | 比企系は、ほぼOY7で調整される。<br>OY7は、桜山Aと合致する。 |                        |
| 49-E19 | OY7     | 桜山A    | Hue5YR7/4   | にぶい橙 |       |   |                                     |                        |
| 50-E20 | OY7'    | 桜山A'   | Hue7.5YR6/6 | 橙    | 朝顔    |   |                                     |                        |
| 50-E21 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 50-E22 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR7/6 | 橙    | 円筒    |   |                                     |                        |
| 50-E23 | OY7・7'  | 桜山A・A' | Hue10YR7/6  | 明黄褐  |       |   |                                     |                        |
| 50-E25 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR7/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 53-E38 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 54-E51 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 55-E60 | OY7・7'  | 桜山A・A' | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 55-E61 | OY7・7'  | 桜山A・A' | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E64 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E65 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E66 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E67 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E68 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E69 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |
| 56-E70 | OY7     | 桜山A    | Hue7.5YR6/6 | 橙    |       |   |                                     |                        |

※報告書掲載全個体を分析対象としているが、破片、あるいは器表面の状況で刷毛目が確定できない個体は除外した。  
※個体番号の赤は、図5の実測図掲載個体。

A群 (比企系)



OY7 (桜山A) 類



B群 (生出塚)

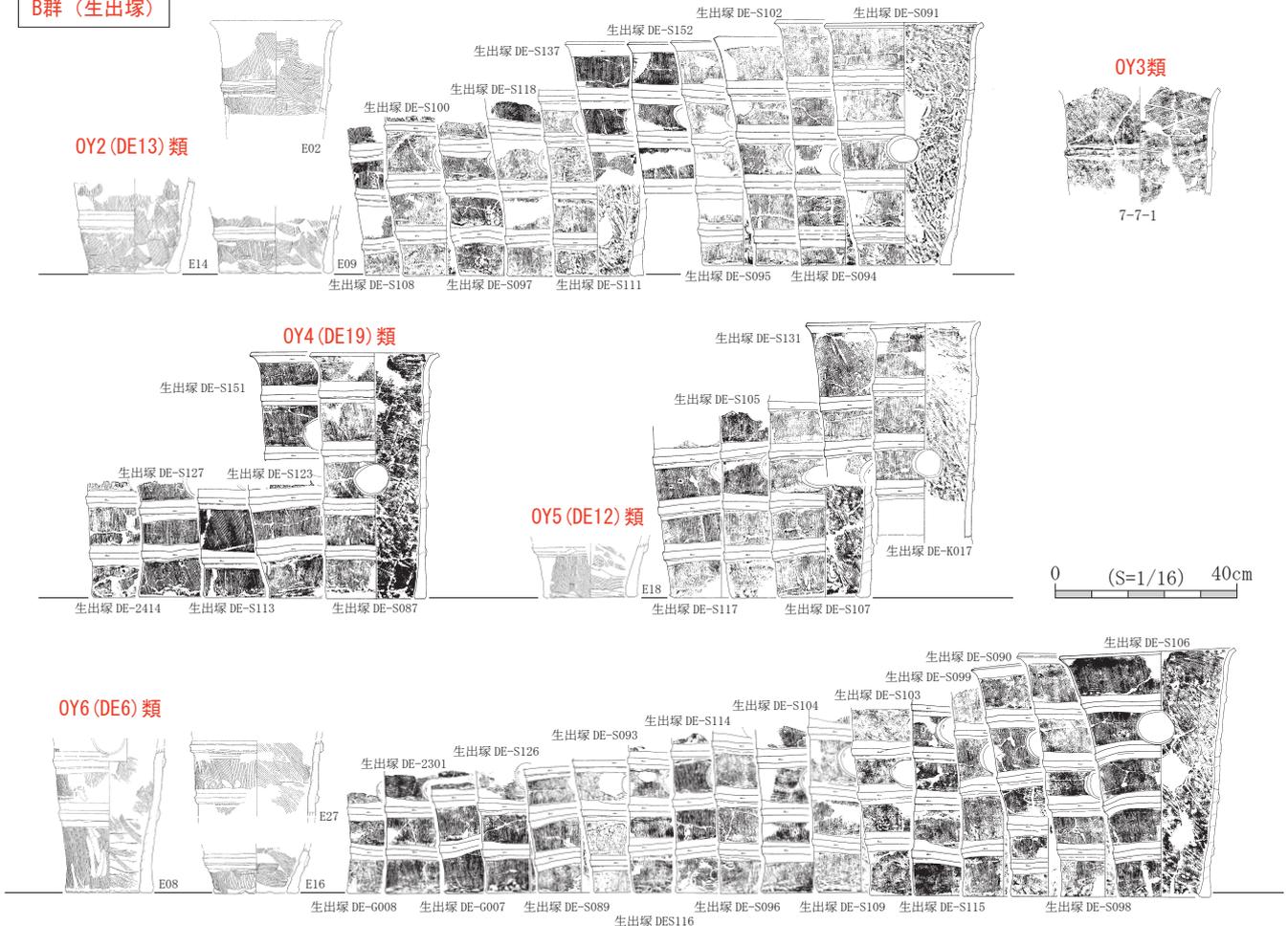


図5 奥の山古墳出土埴輪の分類 (上: A群と桜山窯出土埴輪 / 下: B群と生出塚窯出土埴輪)

が活発化し、生出塚窯産埴輪の盛行を遡る時期に東京湾岸まで分布を広げた系統と考えている（城倉 2018b）。その後、鉄砲山古墳など生出塚Ⅲ期の段階では、首長墓である埼玉古墳群への埴輪の供給は生出塚窯に限定される状況となる。

埼玉古墳群における橙褐色系統の全体像を整理したが、奥の山古墳では桜山窯の中・大型品が供給されていた事実が判明したことになる。2010年に発表した論考（城倉 2010b）では、桜山埴輪窯の報告品すべてを分析対象としたが、桜山窯では少なくとも10基以上の窯でA類（OY7類）が主体を占めていた。その製作量の多さから考えて、兄弟工具が複数存在しており、近接した時期に様々な階層への供給プロジェクトが同時進行していた状況を推定した。図5上に提示した桜山窯A類のうち、A1～A4などは少なくとも3条以上の中・大型品で、直径からするとA1・A2が奥の山古墳に供給された規格の可能性が高い。奥の山古墳では、同じOY7（桜山A）の刷毛目を持つ形象埴輪の破片も多く確認できるので、A8など形象埴輪が供給された点も明らかである。奥の山古墳・桜山窯ともに全形のわかる円筒埴輪が出土していない点は残念だが、「プレ桜山」と呼称してきた二子山B群・瓦塚B群の系譜を引く奥の山A群が桜山A類と判明した意味は大きい。奥の山A群の系譜を引くと想定している愛宕山A群、および將軍山A・B群などの橙褐色系の埴輪群も、比企で生産された可能性が高い点を示唆する状況と言える。

次に、B群については既に刷毛目の同定で生出塚窯産と判明している。今回の分析で、表1にあるように新しくOY8-10類を認識したが、いずれも破片資料で全体像は分からない。OY1・OY3類を含めて生出塚窯と一致が確認できないのは、5種類となるが、生出塚での分析も主要類型に限られているため、今後、さらにデータベースを拡充しつつ、刷毛目の一致率を高めていく必要がある。現段階の奥の山古墳の分析に関して言えば、OY2（生出塚DE13）類、OY4（生出塚DE19）類、OY5（生出塚DE12）類、OY6（生出塚DE6）類が主体になる点を再確認した状況で、前稿から状況が大きく変わるわけではない。なお、後述する鉄砲山古墳の主体類型DE5類も1点確認しているが、わずか1点で状況的には流れ込みの可能性が高いため、ここではOY番号を振っていない。以下、主体類型を中心に分類を整理する。

図5下に示したように、段間のわかる個体は2014年報告資料でも限られているが、OY2・DE13類（E14・E09の個体）、OY5・DE12類（E18の個体）、OY6・DE6類（E16の個体）、いずれも第1段が短い点の特徴で、生出塚遺跡で出土している同じ刷毛目を持つ4条5段の円筒から推定していた状況が追認できた。OY6・DE6類のE08の個体のみ第1段が長いものの、朝顔形埴輪（もしくは形象器台）の可能性もある。報告書では、これらを「低位置突帯」（埼玉県教育委員会 2014 p.174）と呼称し、生出塚窯産埴輪の中で年代の指標になる可能性を指摘するが、実はこの現象にも理由があり、年代とは関係ない規則性が存在する。増田逸朗が的確に指摘したように、北武蔵の円筒埴輪の条数には埼玉古墳群を頂点とした階層性が明示されており（増田 2002b）、同時期に生出塚窯から供給された埴輪に注目すると、同じ刷毛目で調整された法量の近い規格でも、供給古墳の階層に応じて意図的に条数が変えられている。例えば、Ⅱ期前半の二子山古墳FT1（生出塚DE8）類、瓦塚古墳KZ1（生出塚DE8）類は、同じ刷毛目で調整され、法量的にはほぼ同じであるにも拘わらず、前者は5条、後者は4条突帯に設定されたため、結果的に前者が「低位置突帯」となっている。同じ現象は、Ⅱ期後半の將軍山古墳SG3（生出塚DE9）類、愛宕山古墳AT2（生出塚DE9）類でも（器高に違いはあるものの）見られ、前者が4条、後者が3条のため、前者が「低位置突帯」となる。つまり、生出塚窯産の大型・中型円筒埴輪における「低位置突帯」は、一定の方向性に基づく時間的な変化ではなく、円筒埴輪の条数で古墳の階層差を表現する際の意図的な作り分けの結果であり、最下段が「伸長化」する2・3条のスリムな小型品とは区別をする必要がある。生出塚産の中型品が供給される副系列墓の中で、天祥寺裏・奥の山・將軍山古墳で4条5段の「低位置突帯」円筒が見られるのは、愛宕山古墳などもう1つランクが低い古墳に供給される3条4段円筒に対して格差付けが行われた結果なのである。中・大型円筒埴輪における「低位置突帯」は、同一生産地で複数の階層に供給が行われる際に、4条5段以上の規格でのみ生じる特徴的な現象といえる。

### 3. 鉄砲山古墳出土埴輪の分類

#### 3-1 前稿での分類成果

まず、前稿（城倉 2011a・b）での分類について、簡単に整理しておく。

奥の山古墳と同じく、2011 年段階で刊行されていた鉄砲山古墳の報告書（埼玉県教育委員会 1985）で掲載されている埴輪は、ほとんどが破片資料で、少なくとも 4 条 5 段以上と推定できるのは 2 個体（2-10-1/2-16-1 の個体）に限られていた。その他は小破片だったが、そのほとんどが生出塚窯産の可能性が高い胎土・発色（他の群が今後認識される可能性があったため A 群とした）で、実際に TP1（生出塚 DE16）類、TP3（生出塚 DE5）類、TP5（生出塚 DE31）類、TP7（生出塚 DE44）類など、生出塚窯Ⅲ期前半の埴輪との刷毛目の一致を確認した。生出塚窯で確認されている類型は、いずれも寸胴で口縁部と底部がハの字状に開くプロポーションを特徴とする大型円筒埴輪だった。特に TP1（生出塚 DE16）・TP3（生出塚 DE5）・TP5（生出塚 DE31）類は、生出塚窯北支台 C 群の 18・16 号窯で集中的に焼成されており、愛宕山 AT2・將軍山 SG3（生出塚 DE9）類を焼成した 21・22 号窯を切るⅢ期の画期となる時期の生産品と想定できた。さらに、鉄砲山古墳の主体となる DE5 類は、生出塚窯Ⅲ期で大型品から小型品まで多く認められる刷毛目で、神奈川県横浜市北門 1 号墳など東京湾岸までの遠距離供給品にも確認できる注目すべき類型と認識していた。

ところで、前稿（城倉 2011a・b）は埼玉古墳群の編年確立が主目的であったため、破片資料中心の鉄砲山古墳の資料群について詳しく言及するのは避けたが、生出塚窯との関係でいくつかの非常に示唆的な現象がある点には気づいていた。すなわち、TP3（生出塚 DE5）類、TP4（生出塚 DE8）類、TP6（生出塚 DE13）類の存在である。ここでは、生出塚窯における様相を中心に、3 類型に関連する論点を整理しておく。

鉄砲山古墳で主体となる DE5 類はⅢ期に大型品から小型品まで多く認められると同時に、窯体内での「存在時間幅」が長い点に注目していた。前述したように DE5 類は、Ⅲ期前半の北支台 C 群 18・16 号窯で主体になるわけだが、実はほぼ隣接して存在し、AD 群のⅡ期後半に位置付けている 14・15 号窯でも同じ DE5 類が確認できる。14・15 号窯の窯体内から出土した 2 条突帯円筒埴輪（城倉 2011b p.26 図 9 の 14/15-9 の個体）のプロポーションがⅡ期前半～Ⅱ期後半の過渡期的特徴を持つ点、その個体が將軍山古墳に供給された 4 条 5 段の円筒埴輪である SG4（生出塚 DE27）類の小型品である点から考えて、14・15 号窯がⅡ期後半に位置付けられる点は疑いない。14・15 号窯では、DE5 類の刷毛目が認められる 6 条突帯の大型円筒埴輪（DE5B 類）と共に、やはり DE5 類で調整された 3 体のほぼ完形の双脚人物（DE5C 類）が出土している。埼玉古墳群の中でも 5 条以上の大型多条の円筒埴輪が供給されるのは、主系列墓（稲荷山・二子山・鉄砲山古墳の 3 基）に限られている点からすれば、二子山古墳に供給したⅡ期前半に引き続いて、Ⅱ期後半に生産された 14・15 号窯の大型品は、鉄砲山古墳への供給を目的とする以外は考えにくい。

15 号窯の DE5C 類が本来、鉄砲山古墳への供給を目的に生産された可能性は、既に前稿で指摘していたが（城倉 2011b p.11）、Ⅲ期前半の北支台 C 群 18・16 号窯で主体的に生産された鉄砲山古墳のプロジェクトが、実はⅡ期後半の 14・15 号窯で既に始まっていたとすれば、その時間差をどう考えるか、が問題となる。生出塚 A 地点の発掘調査報告書によると、15 号窯は 14 号窯を切って作られており、床面からは 6 条突帯の大型円筒埴輪、2 条突帯の小型円筒埴輪、残りのよい蓋形埴輪、他にも人物・馬・水鳥・家などの破片が検出されている。一方、3 体の双脚人物は窯出しされ「灰原の東壁沿いに立て並べられた状態」で出土しており、文中では「一部のものを窯出しして仕上がりのみたものの、結局焼成失敗により放棄されたものと考えられる。—（中略）—恐らく焼成中に天井の一部が落盤したような不慮の事故により十分な焼成が行われなかったためであり、これが遺物の廃棄だけでなく窯跡の継続使用まで断念せざるを得なかった主な要因」（鴻巣市教育委員会 1987 pp.57-58）と記載されている。14・15 号窯で出土した埴輪の多くは、DE5 類の刷毛目で調整されており、二子山古墳以後で唯一 6 条突帯の大型円筒埴輪が樹立された鉄砲山古墳の生産プロジェクト（大型の形象埴輪・円筒埴輪を含む）がⅡ期後半に開始された点は確実である。だとすれば、鉄砲山古墳の埴輪生産プロジェクトは、二子山・瓦塚古墳のⅡ期前半直後、すなわち奥の山古墳併行段階のⅡ期後半に AD 群の 14・15 号窯で始まったが、何らかの理由で本格化することはなく、C 群 21・22 号窯を中心に行われた愛宕山・將軍山古

墳への供給プロジェクトが一段落した段階で、改めて22号窯を切る18・16号窯で再開された可能性が出てくる。

ここで、14・15号窯での生産を鉄砲山古墳の「初回プロジェクト」、18・16号窯での生産を「再開プロジェクト」と仮称し、その時間差をどのように考えるか、を整理しておきたい。まず、15号窯の報告書の記載を重視し、窯の崩壊など「不慮の事故」により生産が遅延したという可能性を想定することもできるが、一つの窯の崩壊が首長墓への供給プロジェクトを遅延させる理由になるとは考えにくい。生出塚窯における生産の時間差を考える際に注目されるのは、奥の山・鉄砲山古墳の周溝で確認されている前後関係である。奥の山古墳は鉄砲山古墳よりも古く位置付けられているが、発掘調査では奥の山古墳北東側の外溝が、新しく位置付けられるはずの鉄砲山古墳の南西側外溝を避けるような形で歪んでいる(図1)。この点について、発掘報告書では「奥の山古墳の築造時には鉄砲山古墳の兆域が決まっていた可能性が高い」(埼玉県教育委員会2014 p.170)と想定しているが、鉄砲山古墳の兆域確定などは二子山古墳の完成後にすぐに始まっている可能性が想定できる。埼玉古墳群において、大型円筒埴輪を樹立する主系列墓(国造墓)は、中央に軸線を揃えて占地しているが、この配置は首長権が3代に渡って継承されたことを示しており、二子山・鉄砲山古墳のそれぞれの造墓活動は首長権交代とともに始まっていた可能性が高い。

このように考えると、二子山・瓦塚古墳の埴輪生産プロジェクトの直後、14・15号窯で既に始まっていた鉄砲山古墳のプロジェクトが本格化せず、18・16号窯で再開された理由は、その間に入る21・22号窯でのプロジェクト、すなわち副系列墓：愛宕山・将軍山古墳の埴輪生産を優先せざるを得ない状況(別プロジェクトが急遽「割り込んだ」結果)と考えるのが最も自然である。埼玉古墳群は、あくまでも主系列墓(国造墓：稲荷山・二子山・鉄砲山古墳)を主体として世代を越えて計画的に造営が進められていたと思われるが、そこに副系列墓(天祥寺裏・奥の山・愛宕山・将軍山古墳など)の造営が不規則な要素として順次組み込まれていたのが実態ではないだろうか。埼玉古墳群における階層構造の原理、および造営過程を以上のように想定すれば、生出塚窯での生産プロジェクトの動きを整合的に理解することが可能である。

なお、Ⅱ期後半の14・15号窯の鉄砲山「初回プロジェクト」、Ⅲ期前半の18・16号窯の「再開プロジェクト」で共通してみられるDE5類の刷毛目は、Ⅲ期前半～Ⅲ期後半の過渡期に位置付けられる北門1号墳の双脚人物埴輪にも認められる。もちろん、兄弟工具の可能性もあるが、同じDE5類が認められるにも拘らず、北門例は14・15号窯の双脚人物よりも明らかに小型化・簡略化されており、「型的な距離」が認められる。また、Ⅲ期後半としている20号窯でもDE5類の大型円筒埴輪が確認できるように、鉄砲山古墳のプロジェクト、およびそれに関連する中小規模の供給プロジェクトが、Ⅱ期後半・Ⅲ期前半・Ⅲ期後半の各段階に跨る形で長期間、稼働していた点が伺われる。生出塚窯における生産が、あくまでも主系列墓への供給プロジェクトを中心としていた点を読み取ることができる。

DE5類に関連する説明が長くなってしまったが、DE8・DE13類にも言及しておきたい。鉄砲山古墳の破片類の中で、Ⅱ期前半の二子山・瓦塚古墳で認められるDE8類、Ⅱ期後半の奥の山古墳で認められるDE13類の刷毛目が確認できる点も注目していた。前者は2破片、後者は1破片のみ確認しただけで、隣接して存在する瓦塚・奥の山古墳からの資料の流れ込みの可能性を排除することができなかった。そのため、情報は記載したもの(城倉2011b p.81 表7④)、具体的な言及は避けた。前述したDE5類の存在時間幅の問題と連動する可能性も考えてはいたが、鉄砲山古墳の資料増加を待って、改めて論じる計画を立てていた。この点については、新出資料で議論できるようになったため、次節以降で位置付けたい。

以上、稲荷山・二子山古墳に続く三代目の主系列墓でありながら、破片資料だけでほとんど様相が不明だった鉄砲山古墳に関しては、破片資料の刷毛目の同定作業だけでも生出塚窯Ⅱ～Ⅲ期の様々な論点を内包している点を予想していた。しかし、発掘調査の進展、及び報告書の刊行を待つしかない状態が続いていたのである。

### 3-2 新出資料を踏まえた分類成果

鉄砲山古墳の報告書(埼玉県教育委員会2020)に掲載されている埴輪の分析成果については、表2・図6にまとめた。なお、刷毛目の同定に関しては、図4下段に示した。

表2 鉄砲山古墳における新出資料（埼玉県教育委員会 2020）の諸属性

| 個体番号     | 刷毛目（類別） |       | 土色帖         | 色調   | 器種・条数    | 群別                               | 備考                 |
|----------|---------|-------|-------------|------|----------|----------------------------------|--------------------|
|          | 古墳      | 生出塚窯  |             |      |          |                                  |                    |
| 2-16-1   | TP1     | DE16  | Hue10YR6/1  | 褐灰   | 円筒       | A<br>(生出塚)                       | 旧報告資料。             |
| 86-2     | TP1     | DE16  | Hue10R5/6   | 赤    | 円筒（7条以上） |                                  | TP1は、生出塚DE16と合致する。 |
| 86-3     | TP1     | DE16' | Hue2.5YR6/8 | 橙    | 円筒（5条）   |                                  |                    |
| 99-1     | TP1'    | DE16  | Hue2.5YR4/8 | 赤褐   | キヌガサ     |                                  |                    |
| 99-2     | TP1'    | DE16  | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | キヌガサ     |                                  |                    |
| 2-10-1   | TP2     | 未確認   | Hue2.5YR6/8 | 橙    | 円筒       |                                  |                    |
| 2-14-68  | TP3     | DE5   | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒       |                                  | 旧報告資料。             |
| 80-2     | TP3'    | DE5'  | Hue10R4/6   | 赤    | 円筒       |                                  | TP3は、DE5と合致する。     |
| 80-3     | TP3     | DE5   | Hue7.5YR7/4 | にぶい橙 | 円筒（7条以上） |                                  |                    |
| 81-1     | TP3'    | DE5'  | Hue7.5YR7/6 | 橙    | 円筒       |                                  |                    |
| 83-1     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR6/4 | にぶい橙 | 円筒       |                                  |                    |
| 83-2     | TP3'    | DE5'  | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒       |                                  |                    |
| 83-3     | TP3'    | DE5'  | Hue10R4/6   | 赤    | 円筒       |                                  |                    |
| 84-2     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  | 円筒（9条）   | 左利き工人の製品                         |                    |
| 87-1     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR4/6 | 赤褐   | 円筒（6条）   | 87-2と同工品。                        |                    |
| 87-2     | TP3     | DE5   | Hue5YR5/8   | 明赤褐  | 円筒（6条）   | 87-1と同工品。                        |                    |
| 88-2     | TP3     | DE5   | Hue7.5YR6/8 | 橙    | 円筒       | TP3は、DE5と合致する。                   |                    |
| 88-3     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR4/6 | 赤褐   | 円筒       |                                  |                    |
| 89-4     | TP3     | DE5   | Hue7.5YR6/6 | 橙    | 円筒       |                                  |                    |
| 91-4     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  | 円筒       |                                  |                    |
| 92-1     | TP3     | DE5   | Hue10R5/8   | 赤    | 円筒       |                                  |                    |
| 94-1     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR5/6 | 明赤褐  | 朝顔       |                                  |                    |
| 94-2     | TP3     | DE5   | Hue10R5/8   | 赤    | 円筒       |                                  |                    |
| 97-2     | TP3     | DE5   | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒（5条以上） |                                  | 左利き工人の製品。          |
| 81-3     | TP4'    | DE8'  | Hue2.5YR4/8 | 赤褐   | 円筒       |                                  | TP4は、DE8と合致する。     |
| 83-4     | TP4     | DE8'  | Hue2.5YR4/6 | 赤褐   | 円筒       |                                  |                    |
| 85-4     | TP4'    | DE8'  | Hue2.5YR3/6 | 暗赤褐  | 円筒（5条以上） |                                  |                    |
| 95-5     | TP4'    | DE8'  | Hue2.5YR4/8 | 赤褐   | 円筒       |                                  |                    |
| 96-1     | TP4'    | DE8'  | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒       |                                  |                    |
| 97-1     | TP4     | DE8   | Hue7.5YR7/8 | 黄橙   | 円筒       | TP2とよく似ている。85-1と同工品。             |                    |
| 80-1     | TP5'    | DE31' | Hue5YR6/6   | 橙    | 円筒（5条以上） |                                  |                    |
| 81-2     | TP5'    | DE31' | Hue7.5YR7/6 | 橙    | 円筒       |                                  | TP5は、DE31と合致する。    |
| 85-1     | TP5'    | DE31' | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒（6条以上） | 80-1と同工品。                        |                    |
| 89-1     | TP5     | DE31  | Hue10R4/8   | 赤    | 円筒       | TP5は、DE31と合致する。                  |                    |
| 90-3     | TP5'    | DE31' | Hue10R3/4   | 暗赤   | 円筒       |                                  |                    |
| 92-2     | TP5     | DE31  | Hue10R4/8   | 赤    | 円筒       |                                  |                    |
| 2-12-25  | TP6     | DE13  | Hue2.5YR5/8 | 明赤褐  | 円筒       | 旧報告資料。奥の山古墳から流れ込みか。              |                    |
| 2-22-125 | TP7     | DE44  | Hue7.5YR7/2 | 明褐灰  | 円筒       | 旧報告資料。                           |                    |
| 84-1     | TP8     | 未確認   | Hue2.5YR4/6 | 赤褐   | 円筒（7条以上） | TP8は、新規確認。生出塚と一致確認できず。           |                    |
| 89-2     | TP8'    |       | Hue5YR5/6   | 明赤褐  | 円筒       |                                  |                    |
| 88-1     | TP9     |       | Hue10R4/8   | 赤    | 円筒（5条以上） | TP9は、新規確認。生出塚と一致確認できず。           |                    |
| 88-4     | TP10    |       | Hue10R4/6   | 赤    | 円筒       | TP10は、新規確認。生出塚と一致確認できず。左利き工人の製品。 |                    |

※残りの良い個体を中心に分析を行った。  
 ※前稿（城倉2011a）で分析した重要度の高い旧報告資料（埼玉県教育委員会1985）も表に加えた。備考部分に記載。  
 ※個体番号の赤は、図6の実測図掲載個体。

1985年の報告書段階では、鉄砲山古墳出土埴輪のほとんどは破片資料だったが、2020年の報告書で円筒埴輪の全形がわかる資料がかなり増加した。基本的に大部分が生出塚窯産と考えられる点は、前稿から変更はなく、確実に他の窯で生産されたと思われる資料は確認できない。今回、新しくTP8-10を認識したが、TP2と合わせて4種類が生出塚窯との一致を確認できていないことになる。なお、前述した奥の山古墳で主体的な類型の1つであるTP6（生出塚DE13）類だが、今回の調査でも類例は増えず、類型として設定することが難しいことが判明した。奥の山古墳と鉄砲山古墳は、外溝が接するほどの距離で、前者がⅡ期後半、後者がⅢ期前



半に位置付けられるため、DE13 類も現段階では奥の山古墳からの流れ込み（奥の山古墳における DE5 類と同じ位置付け）と判断しておく。以上を除くと、鉄砲山古墳で主体となるのは前稿で認識していた TP1（生出塚 DE16）類・TP3（生出塚 DE5）類・TP5（生出塚 DE31）類に、新しく TP4（生出塚 DE8）類を加えた 4 種類ということになる。TP4（生出塚 DE8）類に関しては、前稿段階ではわずかに数破片しか確認できなかったため、二子山・瓦塚古墳からの資料の流れ込みの可能性を考慮していたが、今回は比較的多くの資料が確認でき、5 条以上の大型円筒と分かる個体も出土したことで、確実に鉄砲山古墳に供給された類型として設定することができた。以下、 6 に基づいて順番に各類型の特徴をまとめ、論点を整理しておく。

TP1（生出塚 DE16）類は、生出塚北支台 C 群 18・16 号窯で焼成された個体で、寸胴で口縁部がラッパ状に開く器形を特徴とする。生出塚窯で確認されているのは 5 条突帯の円筒埴輪（DE 地点 1802・1804 の個体）だが、今回は 86-2 のように 7 条以上の個体も確認でき、蓋など大型の器財埴輪も含まれる。ちなみに、99-1 の蓋は生出塚遺跡 A 地点 14・15 号窯出土品（[鴻巣市教育委員会 1987 p.20 第 16 図](#)）と類似している。

TP2 は、新しい個体を確認できなかったが、2-10-1 の個体のように寸胴な器形で、最上段が長いのが特徴である。後述する TP5（生出塚 DE31）に木目が近い刷毛目だが、最上段が長い点など器形的にも近い。

TP3（生出塚 DE5）類は、生出塚窯の北支台を中心として広い範囲に分布しており、小型品・中型品・大型品の様々な円筒埴輪の規格、人物・動物・家・器財などの多種の形象埴輪に同じ刷毛目が認められ、生産地である窯での存在時間幅も長い点を確認できる類型である。鉄砲山古墳の TP3（生出塚 DE5）類は、6～9 条の大型品だが、出土埴輪中最も多く認められる類型で、間違いなく本古墳の主体的な類型である。DE5 類が存在する生出塚Ⅱ期後半～Ⅲ期においては、6 条以上の大型円筒埴輪の供給先は鉄砲山古墳しか存在しておらず、生出塚で確認されている DE5 類の大型円筒、双脚人物を含む大型の形象埴輪などは、基本的に鉄砲山古墳への供給を目的に製作された可能性が高い。前述した桜山窯 A 類と同じように、生出塚 DE5 類も同時期に稼働した様々な階層へのプロジェクトで製作された埴輪群と思われるが、鉄砲山古墳から出土した大型品に限ってみても、明らかに右利きの同工品と思われる一群（87-1・87-2）もあれば、左利きの工人が製作した埴輪（84-2）もあり、法量・条数・規格など非常に多様である。同じ刷毛目を生み出す兄弟工具が複数（基本的には木目が一致するため工具自体は少数）存在すると同時に、複数工人が製作に関与した点が明らかな類型である。個体内でも諸属性の振れ幅が大きい場合もあり、大型品などは「個体内工程内分業」も一般的だった点が推定できる。今、鉄砲山古墳出土の TP3（生出塚 DE5）類を細分することは可能だが、大型古墳の埴輪群をほんの一部の資料のみで細分するのは危険なので、ここでは刷毛目共通類型として大きな単位で把握しておく。

TP4（生出塚 DE8）類は、Ⅱ期前半の二子山古墳 FT1 類（5 条）、瓦塚古墳 KZ1 類（4 条）と同じ刷毛目である。二子山・瓦塚古墳の両類型は大型の円筒埴輪で、幅広で非常に突出度が高い突帯を特徴とする。Ⅱ期前半の FT1・KZ1 類に対して、Ⅲ期前半の鉄砲山古墳 TP4 類には時期差があり、前稿段階では確認できるのも破片数点だったため、資料の流れ込みの可能性を排除できなかった。しかし、今回、器形がわかる資料（85-4）も含めて大きな個体が複数確認できるようになり、確実に鉄砲山古墳に供給された類型として認識できるようになった。TP4（DE8）類は、少なくとも 5 条以上の大型多条品だが、FT1・KZ1 と酷似しており突帯の突出度も非常に高い。前述した TP3（生出塚 DE5）類と比べると同じ古墳出土品とは思えないほど突出度が異なっている。この類型は、Ⅱ期前半の二子山・瓦塚古墳の埴輪生産プロジェクトに関わった工人の製作品の可能性が高い。

TP5（生出塚 DE31）類は、生出塚北支台 C 群の 18 号窯で焼成された類型で、今までは資料の全形が把握できなかったが、残りの良い個体が複数確認された。やはり大型多条品だが、81-2 のように底部がハの字状に開く特徴などは、TP3（生出塚 DE5）類と共通する。

TP8・9・10 類（10 類は左利き工人）は、個体数が少なく特徴を把握することは難しいが、明らかに生出塚産と考えられる大型多条の円筒埴輪である。

以上、鉄砲山古墳出土埴輪は、大型円筒を中心とし、いくつかの類型で構成されるが、TP3（生出塚 DE5）類が主体となる点、Ⅱ期前半に存在した TP4（生出塚 DE8）類が確実な類型として設定できた点が重要である。

## 4. 生出塚窯における大型古墳への埴輪供給プロジェクト

### 4-1 生出塚窯の支群構成と変遷

2・3章で、奥の山古墳（埼玉県教育委員会 2014）・鉄砲山古墳（埼玉県教育委員会 2020）の新出資料を踏まえて、再分類した結果を示した。前稿（城倉 2011a・b）から分類は変更していないが、①奥の山古墳 A 群が桜山窯の生産品であると確定した点、②両古墳の分析で生出塚Ⅱ～Ⅲ期の生産体制を考える上で重要な幾つかの類型を見出した点、この2点が大きな成果である。4章では、特に②の点に絞って、生出塚窯におけるⅡ期～Ⅲ期の埼玉古墳群への埴輪供給プロジェクトに関して、考察を深める。まずは、前提となる生出塚窯における支群構成とその変遷を整理しておく。

生出塚遺跡で検出されている40基の埴輪窯は、山崎武によって全て報告されている。各報告書は山崎論文（山崎 2021）で引用されているので、ここでは省略し、[図7](#)（城倉 2010b p.24 [図7](#)・p.25 [図8](#)）に基づいて簡単に整理しておく。生出塚遺跡は大きく北支台と南支台に分かれて分布するが、南支台→北支台→南支台と「支群シフト」（城倉 2011b p.68）を繰り返して生産していた点が判明している。八手状に形成された支群内の窯には、物理的な切り合い関係があるため、窯の前後関係の把握が可能である。その支群内の切り合い関係と、窯体内から出土した2条突帯の円筒埴輪によってⅠ～Ⅲ期、それぞれ前後半を含む6段階編年を行ったのが[図7右上](#)である。南支台で小規模な生産から始まった生出塚窯は、Ⅰ期の段階では埼玉古墳群の天祥寺裏古墳などに中型品を供給していた。しかし、南支台 F 群最後の30号窯・北支台 AD 群最初の28号窯で二子山・瓦塚古墳に供給された大型円筒埴輪（DE8・M6 類型）が焼成されたように、二子山古墳への大型品の供給を契機として、北支台に移動して大規模生産（Ⅱ期）が開始される。Ⅱ期は北支台で AD・B・C 群が同時稼働する生産の最盛期で、Ⅱ期後半には奥の山古墳・愛宕山古墳・将軍山古墳に中型品が供給されている。Ⅱ期後半の北支台 C 群の21・22号窯では愛宕山・将軍山古墳に供給された DE9 類が一括焼成されていたが、その窯を切る18・16号窯で鉄砲山古墳に供給された DE5・DE16・DE31 類が焼成されており、鉄砲山古墳への供給を画期としてⅢ期を設定している。Ⅲ期は遠距離供給用の細身で第1段の長い2・3条の小型円筒埴輪が多く作られる時期で、この時期に生出塚窯産埴輪は東京湾岸まで到達する遠距離供給を実現するが、南支台 H 群を最後に突然、生産が停止されることになる。

以上が生出塚窯における変遷の概要だが、本論では奥の山・鉄砲山古墳の新出資料に注目して、Ⅱ～Ⅲ期の生出塚窯における生産の具体像について考察を加える。

### 4-2 生出塚窯Ⅱ期の様相—奥の山古墳出土埴輪の分析から—

奥の山・鉄砲山古墳出土埴輪の再検討を踏まえて、生出塚窯におけるⅡ～Ⅲ期の埼玉古墳群への供給プロジェクトの様相を整理したのが[図8](#)である。奥の山古墳の埴輪に関しては、従来からⅡ期前半の28・27号窯を主体として生産された二子山・瓦塚古墳への供給に続くプロジェクトとして、19・23・(21)号窯で生産された点を確認していた。今回の分析では、奥の山古墳の非生出塚窯産埴輪（A 群・OY7 類）が、桜山窯 A 類と判明したことで、「プレ桜山」と想定してきた二子山 B 群・瓦塚 B 群の直後に位置付けられる点が確定した。つまり、生出塚窯で確認されている埼玉古墳群の前後関係が、桜山窯でも追認されたことになる。なお、生出塚窯では現状、3基しか確認されていない単独窯（他と切り合い関係を持たない窯）である24号窯でも、奥の山古墳の12・19 類型が確認されており、同じ時期の稼働が想定できる。さらに、奥の山古墳の主体類型（DE6・12・13・19 類）を焼成した19・23号窯を切る形の21・22号窯では、愛宕山・将軍山古墳に供給する埴輪（DE9 類）が焼成され、それぞれ3条・4条の格差付けが行われていた。

以上、Ⅱ期後半は[図7右上](#)で示したように、北支台 AD・B・C 群が同時稼働し、最も埴輪窯が多く作られた時期にあたるが、これは埼玉古墳群の副系列墓である奥の山・愛宕山・将軍山古墳への供給プロジェクトが集中した結果と推定できる。これら副系列墓への埴輪の供給は、Ⅱ期前半の二子山、Ⅲ期前半の鉄砲山への供給プロジェクトに挟まれる形（Ⅱ期後半）で存在しているが、後述するように主系列墓への供給プロジェクトが前後の段階（二子山古墳の場合はⅠ期後半とⅡ期後半：DE8 類など／鉄砲山古墳の場合はⅡ期前半とⅢ期

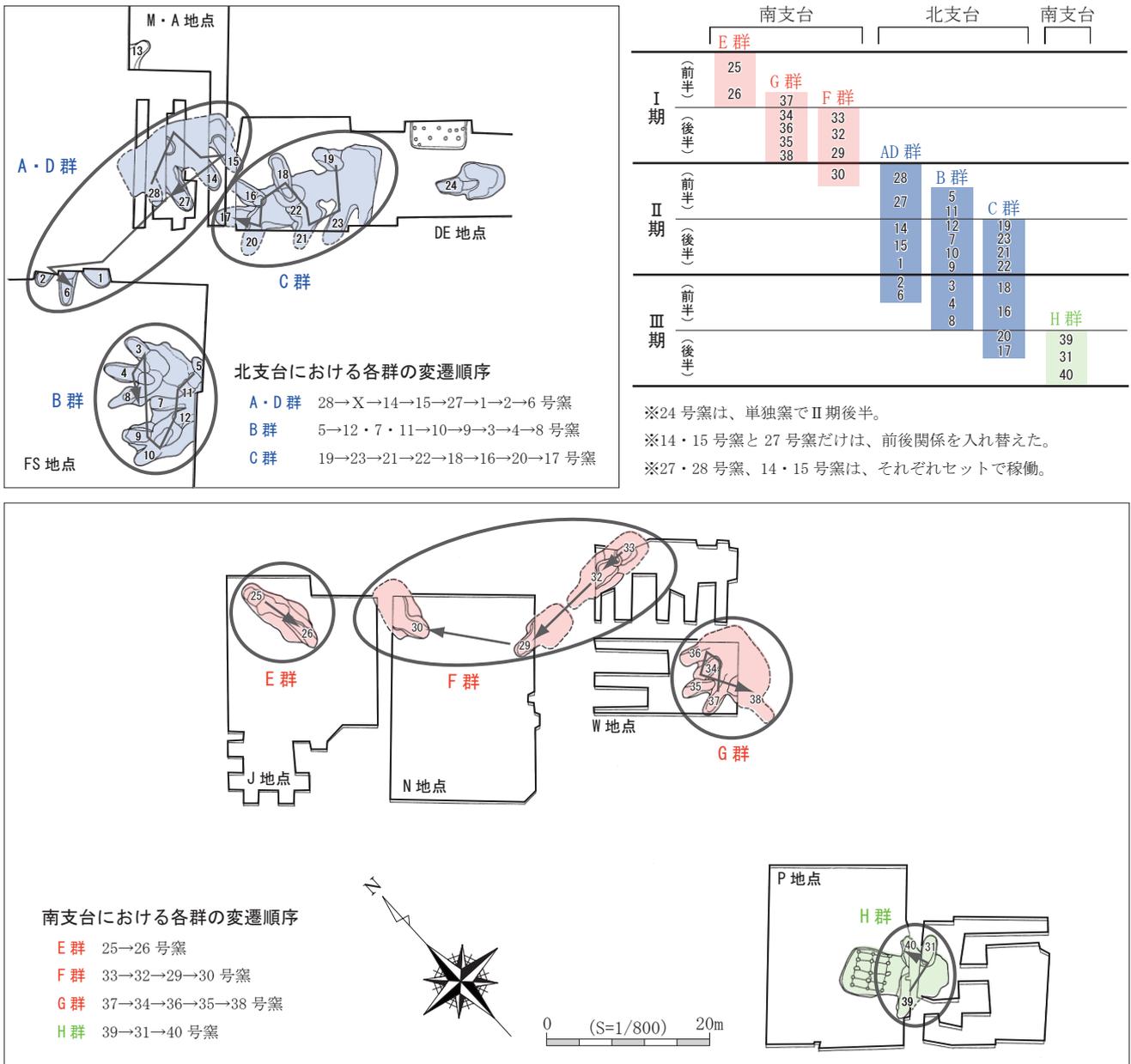


図7 生出塚遺跡における支群構成と窯の変遷

後半：DE5 類など) にまで跨るのに対して、II 期後半内でプロジェクトが完結する点に特徴がある。すなわち、生出塚窯における生産は、あくまでも二子山・鉄砲山古墳の2つの主系列墓への供給プロジェクトを中心に大きくは構成されており、副系列墓も含めた中小規模墳への供給は、その2大プロジェクトの下位に存在する個別プロジェクトとして、その都度、生産に対応するような体制であった点が推定できる。

#### 4-3 生出塚窯Ⅲ期の様相—鉄砲山古墳出土埴輪の分析から—

続くⅢ期前半は、鉄砲山古墳に供給するためのプロジェクトが18・16号窯を中心に稼働した点が大きな変化である。前稿(城倉 2011a・b)段階では、鉄砲山古墳の様相が不明だったため、この時期の生産体制の具体像を把握することが難しかったが、資料の増加によって、図8に示したように多くの知見を得ることができた。前述したように、鉄砲山古墳ではDE5・8・16・31類が主体的な類型であることが判明したが、特に注目されるのはDE5・DE8類型の存在である。ここでは、両者の存在形態に注目してみる。

DE5類は、以前から鉄砲山古墳の主体類型と想定していたが、新出資料でも供給された埴輪のかなりの部分をこの類型が占める点が明らかになった。DE5類は、生出塚北支台の広い範囲で確認できるが、古く位置

|       |    | 南支台                                  | 北支台   |
|-------|----|--------------------------------------|---|
| I 期   | 前半 | 近隣の小型古墳へ2条円筒を供給<br>埼玉古墳群への供給は開始していない | ※供給古墳の様相から焼成窯を推定している場合もある。  |
|       | 後半 | F32・33号窯/W1・W4類型→天祥寺裏古墳              |   |
| II 期  | 前半 | F30号窯/DE8類型                          | AD28・27号窯/DE8・M6類型 (5条) →二子山古墳<br>(4条) →瓦塚古墳  |
|       | 後半 |                                      | C19・23・21号窯/DE6・12・13・19類型→奥の山古墳<br>C21・22号窯/DE9類型 (3条) →愛宕山古墳<br>(4条) →将軍山古墳<br>24号単独窯/DE8・12・19類型<br>AD14・15号窯/DE5・27類型 |
| III 期 | 前半 |                                      | C18・16号窯/DE5・8・16・31・44類型→鉄砲山古墳・北門1号墳   |
|       | 後半 | H31号窯/P1-9類型→山倉1号墳など                 | C20号窯/DE5・44類型  |

図8 生出塚窯における埼玉古墳群への埴輪供給プロジェクトと類型の連鎖

付けられるのはII期後半の14・15号窯である。3-1で論点を整理したように、鉄砲山古墳への埴輪供給プロジェクトは、14・15号窯で始まったものの、本格化する前に21・22号窯を中心とする愛宕山・将軍山のプロジェクトが入り、それが終わった段階で18・16号窯において再開した可能性が高い(III期の開始)。また、DE5類の刷毛目は、III期前半を中心として大中小様々な規格の円筒埴輪、人物・動物・器財・家など多様な形象埴輪に認められ、兄弟工具が複数存在すると同時に、利き腕やクセの異なる数人の工人が関与する形で生産された点が確実である。鉄砲山古墳で認められたこのDE5類、あるいはDE44類は、III期後半の20号窯でも小型円筒埴輪に認められ、III期前半の神奈川県横浜市の北門1号墳でも確認できるように、鉄砲山古墳の生産を契機として生出塚窯産埴輪は東京湾岸まで到達する広域供給を実現することになる。以上、DE5類はII期後半・III期前半・III期後半の3段階に跨って存在した類型と把握できる。

DE5類に関しては、以前からその絶対量の多さから、生出塚の窯内で存在時間幅が長い点を確認していたが、DE8類に関しては鉄砲山古墳で今回類型として設定できたことから、同じく存在時間幅が長い類型と確定した。DE8類はII期前半段階の南支台F群30号窯で確認でき、その後、北支台の28・27号窯に「支群シフト」して二子山・瓦塚古墳への大規模供給プロジェクトが始まる。直径の大きな多条(4・5条)突帯の大型円筒埴輪で、新屋敷25号墳(25-4)や同C区埴輪棺(228-2)など、生出塚窯に隣接する新屋敷古墳群でも埴輪棺として出土しており、埴輪製作に関わる集団では埴輪棺としてのみ大型品の使用が認められていた点がある(城倉2008 p.105)。DE8類がこのII期前半を中心に最も多く製作された点は確かだが、以前からII期後半の単独窯である24号窯で5条突帯の円筒埴輪(2420)としてDE8類が存在する点は注目していた。ところが、今回、鉄砲山古墳TP4(生出塚DE8)類が5条以上の円筒埴輪として類型化できたことで、この類型が鉄砲山古墳の埴輪生産が本格化するIII期前半まで存在していた可能性が高くなった。存在時間幅はDE5類と近く、II期前半・II期後半・III期前半の3段階に跨って存在する。もちろん、大型品は後の時代に「焼台」として頻繁に使用されるため、窯内から出土する大型品の位置付けには注意が必要だが、DE8類に関して言えば、II期前半は30・28・27号窯、II期後半は24号窯で認められるだけでなく、III期前半の埴輪が供給された鉄砲山古墳に安定した類型として存在しており、存在時間幅が長い点は確実である。実際には、III期前半段階の窯内でDE8類が確認されているわけではなく、生出塚遺跡で確認できるのはII期後半の24号窯である。そのため、II期後半の14・15号窯での鉄砲山古墳「初回プロジェクト」並行期の生産品、すなわち、二子山古墳プロジェクトの「残滓」と把握することも出来なくはないが、鉄砲山古墳から出土したTP4(DE8類)を見ると、

二子山・瓦塚古墳段階の DE8 類よりも直径が小さく細身になっており、明らかに鉄砲山古墳の他の類型とプロポーションが共通する「新しい」埴輪である。一方で、他類型に比べて突帯の突出度が非常に高く、Ⅱ期前半段階の FT1・KZ1 類の特徴はしっかりと継承している。このように DE8 類は、DE5 類と同じく類型内で型式差を内包しながら、3 段階に跨って存在していることになる。残念ながら、全形がわかる資料は数個体しか存在しないため、DE8 類が全て同工品かどうかは断定できないが、規格差はともかく突帯の突出度など特徴的な部分を見る限り、同工品、あるいはかなり近い工人が製作に継続的に関与したものと考えられる。

以上、鉄砲山古墳で確認できた DE5・DE8 類型を中心に、Ⅱ～Ⅲ期の大型古墳への供給プロジェクトの実態と、特定類型の複数プロジェクト間の連鎖現象を整理してきた。北武蔵の拠点生産地である生出塚窯と主要な供給先である埼玉古墳群を結び付けて分析をしていくと、あくまでも主系列墓（二子山・鉄砲山古墳）への供給プロジェクトが生出塚の埴輪生産の中心であり、両古墳の大型プロジェクト自体がⅡ・Ⅲ期の支群シフトを含む生産の画期となっている点が見える。また、その画期の中で特定類型の製作に関与する中心的な工人たちが、世代を超えて活躍する体制がわかってきた。このような埴輪の製作技術を保持する工人、あるいはそのグループが徐々に入れ替わることで世代交代が進み、漸移的に型式変化が生まれている点も把握できる。

#### 4-4 中心的工人の活動痕跡—双脚武人の分析から—

最後に、中心的な埴輪工人たちの活動痕跡を示す資料として、山崎武が注目した双脚武人（山崎 2021）についても簡単に言及しておく。図 9 に示したように、生出塚窯ではⅡ期後半～Ⅲ期にかけて、正装男子・武人・筒袖男子などと呼ばれる特徴的な双脚人物が製作された。非常によく似た造形表現が認められる一群であるが、調整に使用された工具、生出塚窯における出土位置、供給古墳によって、Ⅱ期後半・Ⅲ期前半・Ⅲ期後半の各段階に位置付けることが出来る。図 9 では山崎の「同工品識別」に基づいて、A～D 類としたが、前述した DE5 が見られるⅡ期後半の A 類（DE5C 類）とⅢ期前半の A' 類（DE5C' 類）を比べると、後者はかなり造形が簡略化されており、同じ工具（兄弟工具を含む）を継承した別工人の可能性が高い。

本資料群に関しては、「双脚人物と工人の活動期間」に着目して検討したことがあるが（城倉 2009 pp.108-109）、現段階の状況をまとめてみたい。まず、Ⅱ期後半の生出塚 15 号窯出土の三体の双脚人物（DE5C 類）（工人 A）が、鉄砲山古墳の「初回プロジェクト」で生産された点は本論で既に言及した。一方、生出塚 3・4・8 号窯一括の武人は、DE5 類の兄弟工具と思われる A1・FS7 類で調整されており、鉄砲山古墳の「再開プロジェクト」段階であるⅢ期前半に位置付けられる。この武人埴輪については、熊谷市の大境 6 号墳で表現が酷似する個体（大境 A 類）が出土しており、刷毛目は異なるが同工品の可能性が高い（工人 B）。また、生出塚Ⅲ期前半に位置付けている神奈川県横浜市の北門 1 号墳の双脚武人も、15 号窯双脚武人と同じ DE5 類の刷毛目が認められる（工人 A'）。大境 6 号墳出土の 2 条 3 段の円筒（熊谷市教育委員会 2015 p.539 第 157 図 3 の個体）と北門 1 号墳出土の 2 条 3 段の円筒（城倉 2011b p.14 図 4 ①の DE5A' 類型）は、プロポーションから同段階と見られるため、Ⅲ期前半の位置付けとも整合的である。さらに、生出塚 N 地点 29 号窯で一括廃棄された新しい埴輪群の中にも双脚人物が確認できる。この N4 類の双脚人物に関しては、一括品に含まれる 3 条 4 段の円筒（城倉 2011b p.18 図 4 ⑤ N29 号窯類型）が、最下段の伸長化したスリムな遠距離供給用埴輪であり、南支台最終段階の P31 号窯で焼成された山倉 1 号墳（小橋 2004）と同じⅢ期後半に位置付けられる。

このように整理すると、A・A'・B 類に関しては、同一工人やかなり近い工人の製品群であることがわかる。基本的には鉄砲山古墳のプロジェクトを率いた DE5 類の工人グループが関与している可能性が高く、Ⅱ期後半～Ⅲ期前半まで段階を越えて、同一の表現形式の人物埴輪を製作している。一方、Ⅲ期後半段階の N29 号窯の N4 類型、山倉 1 号墳の P5 類型は、他類型との工具・工人の連鎖は確認できない。しかしながら、製作技法や表現をⅢ期前半から継承している点は明らかで、同系統の人物埴輪群が「模倣縮小」（小橋 2004 p.220）によって、徐々に小型化・簡略化されていく傾向が読み取れる。同系統における双脚人物の形態変化については、上総北東部における九十九里 B の「ヒゲの武人」でも整理した（城倉 2017 p.24）が、ほぼ同じ変化の方向性が認められる点に注意しておきたい。

以上、生出塚窯の大型円筒埴輪で見られた図 8 のような中心的類型の連鎖現象が、図 9 のように双脚人物

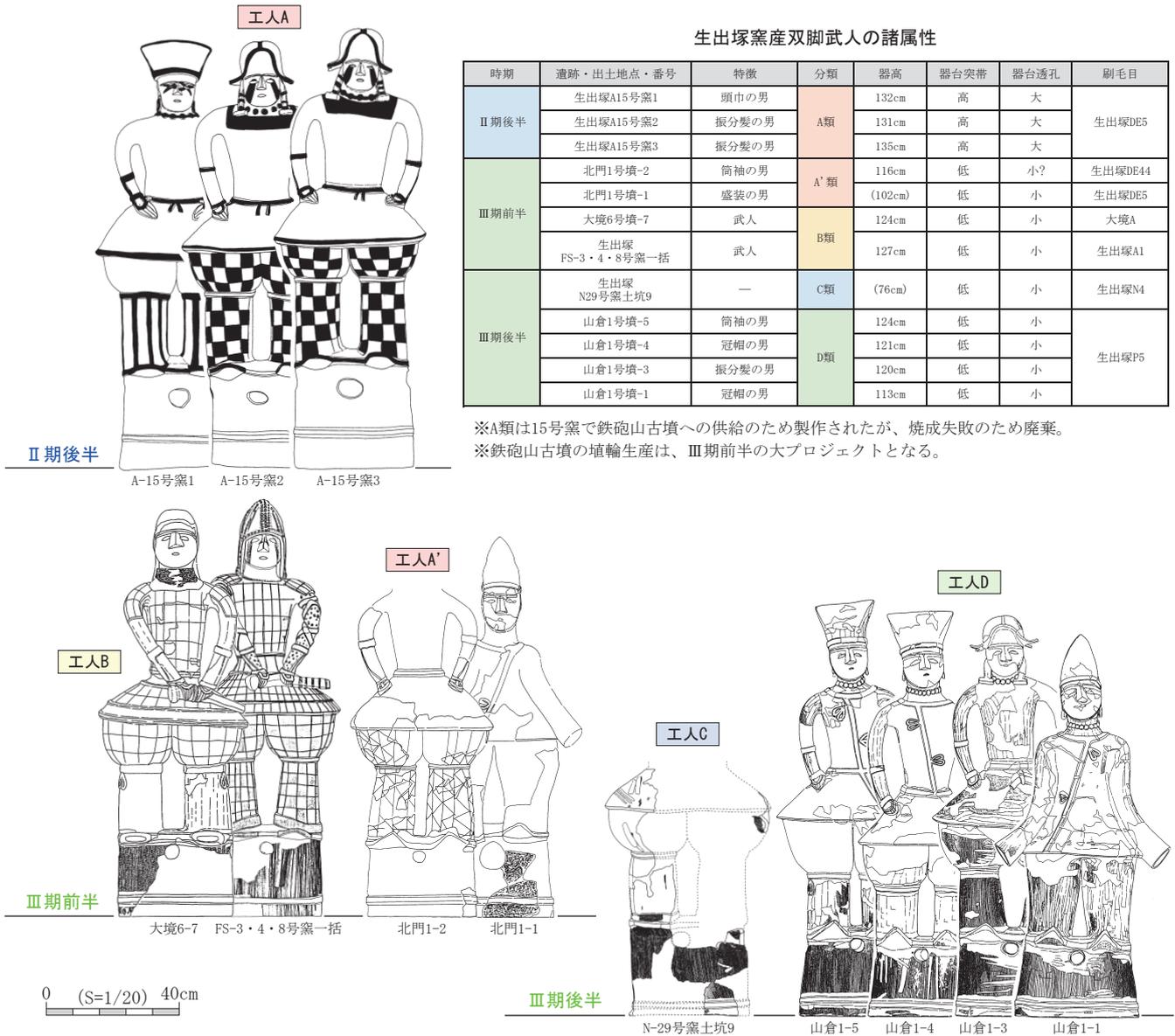


図9 双脚人物埴輪を製作した工人の変遷

でも確認できる点は重要である。現段階で判明しているのは、中心的な工人の動態のみだが、今後は生出塚窯における破片資料の分析、あるいは小型埴輪の供給先である中小規模墳の分析を蓄積し、北武蔵地域における埴輪生産の具体像をもっと掘り下げていく必要がある。

#### 4-5 結論

最後に、本論での成果を箇条書きでまとめておく。

- ①奥の山古墳出土埴輪は、A群（桜山窯産）、B群（生出塚窯産）に分類できる。
- ②奥の山A群は、従来、生産地が不明だったが、桜山窯A類と刷毛目が合致し、生産地が確定した。
- ③奥の山B群は、生出塚窯産のDE6・12・13・19が主体的類型である点を再確認した。
- ④鉄砲山古墳出土埴輪は、基本的に生出塚窯産（A群）で、他の窯の生産品は今のところ確認できない。
- ⑤鉄砲山A群は、生出塚窯産のDE5・8・16・31が主体的類型であることを確認した。
- ⑥奥の山・鉄砲山古墳の新報告資料の検討を踏まえて、生出塚Ⅱ～Ⅲ期の様相を整理した。
- ⑦Ⅱ期前半～Ⅲ期前半まで確認できるDE8類、Ⅱ期後半～Ⅲ期後半まで確認できるDE5類など、埼玉古墳群の主系列墓：二子山・鉄砲山古墳に供給された類型が各段階を越えて存在しており、それらを製作した工人

(グループ) が生出塚窯における継続的な生産活動の中心的役割を果たした可能性を指摘した。

## おわりに

埼玉古墳群の奥の山古墳、および鉄砲山古墳の新報告資料(埼玉県教育委員会 2014・2020)を再検討し、前稿(城倉 2011a・b)での分類の補足を行うとともに、生出塚窯におけるⅡ～Ⅲ期の生産に関して、中心的な類型を基にその実態を復原した。東国最大規模の埴輪窯である生出塚窯(確認されているのは40基)、および古墳時代後期を通じて北武蔵の中心として「武蔵国造」の奥津城であった埼玉古墳群、両者が埴輪の分析でしっかりと結びついている点は非常に大きな意味がある。近年では、埴輪生産を地域社会の歴史的な脈の中で捉え直そうとする意欲的な研究(東影 2020・花熊 2020 など)も多くあり、今後、各地で生産・供給の実態解明が進み、埴輪生産の普遍性と地域性が把握されていくことが期待される。

本論は、その基礎を固めるためのささやかな基礎作業である。今後も埼玉古墳群の新報告資料については補足の分析を行い、埼玉古墳群の歴史的意義を考究していきたい。

## 謝辞

本論執筆に際しての資料調査では、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・熊谷市教育委員会の職員の皆様にご配慮をいただいた。なお、本論をまとめる直接の契機となったのは、生出塚窯産埴輪の研究で大きな業績を残された山崎武氏(元鴻巣市教育委員会)に最新論文(山崎 2021)をいただき、その内容に触発されたことが大きい。学生時代からお世話になってきた山崎氏の学恩に、心より感謝を申し上げたい。また、小橋健司氏(市原市埋蔵文化財調査センター)・若狭徹先生(明治大学)には、刊行前に本論をお読みいただき、専門的な立場からの確かなコメントをいただいた。さらに、英文要旨については、山藤正敏氏(奈良文化財研究所)に翻訳いただいた。最後になりましたが、執筆に際してお世話になった方々のご芳名を記し、感謝を申し上げます。

青木 弘・青笹基史・新井 端・石井友菜・大谷 徹・梶原悠渡・菊地耕晏・呉 心怡・高橋 亘・田邊えり・谷川 遼・伝田郁夫・ナワビ矢麻・野中 仁・別所鮎実・水口由紀子・松田 哲・山田琴子・吉田修太郎・吉野 健(五十音順・敬称略)。

## 引用文献

- 加部二生 2013 「上毛野君の考古学的研究」『国造制の研究—資料編・論考編—』八木書店 pp.679-700
- 熊谷市教育委員会編 2015 「30.大境南古墳群(64-050)」『熊谷市史 資料編1 考古』pp.535-541
- 鴻巣市教育委員会 1987 『鴻巣市史跡群Ⅱ 生出塚遺跡(A地点)』
- 小橋健司 2004 「山倉1号墳出土埴輪について」『市原市山倉古墳群』財団法人市原市文化財センター pp.185-235
- 小橋健司 2021 「埴輪の来たち—山倉1号墳築造プロジェクトから見た古墳構築財の流通—」『埼玉古墳群とモノの動き』企画展関連シンポジウム資料集 埼玉県立さきたま史跡の博物館 pp.23-30
- 埼玉県教育委員会 1985 『鉄砲山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1988 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』
- 埼玉県教育委員会 2014 『史跡埼玉古墳群 奥の山古墳 発掘調査・保存整備事業報告書』
- 埼玉県教育委員会 2018 『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』
- 埼玉県教育委員会 2020 『特別史跡埼玉古墳群 鉄砲山古墳 発掘調査報告書』
- 埼玉県教育委員会 2023 『特別史跡埼玉古墳群 二子山古墳発掘調査報告書』
- 埼玉県史編纂室 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ—桜山窯跡群—』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006 『杉の木遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011 『比企郡川島町富田後遺跡』
- 坂本和俊 1996 「七輿山古墳出現の背景」『群馬考古学手帳』6 pp.51-74
- 城倉正祥 2008 「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』60-1 pp.97-107
- 城倉正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 城倉正祥 2010a 「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』94-1 pp.1-50
- 城倉正祥 2010b 「生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産」『考古学研究』57-2 pp.38-58
- 城倉正祥 2011a 「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』5 pp.57-91
- 城倉正祥 2011b 「北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」奈良文化財研究所 pp.1-122
- 城倉正祥 2011c 「武蔵国造争乱」『史観』165 pp.107-146
- 城倉正祥 2017 『デジタル技術でせまる人物埴輪—九十九里の古墳と出土遺物—』吉川弘文館
- 城倉正祥 2018a 「埼玉古墳群出土の円筒埴輪の特徴と編年的位置付け」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』pp.201-210
- 城倉正祥 2018b 「北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』pp.211-222
- 城倉正祥ほか 2018 「埼玉二子山古墳のGPR調査2017」『溯航』36 pp.1-18

- 城倉正祥編 2022 『埼玉県行田市 埼玉愛宕山古墳の測量・GPR 調査』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 pp.1-32
- 城倉正祥編 2023 『埼玉県行田市 埼玉二子山古墳の測量・GPR 調査』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 pp.1-35
- 杉崎茂樹 1988 「まとめ」『丸墓山古墳・埼玉 1～7 号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会 p.11
- 滝澤友子 2007 『北門古墳群 I』株式会社盤古堂
- 田中正夫 1994 「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡 (A 区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 p.129
- 伝田郁夫ほか 2011 「続比企の埴輪」『埴輪研究会誌』15 pp.55-77
- 中井 歩 2019 「二子山古墳墳丘造り出しの調査について—平成 29 年度発掘調査成果を中心として—」『埼玉県立史跡の博物館 紀要』12 pp.25-42
- 花熊祐基 2020 「生産遺跡からみた後期の埴輪生産の実態」『地域社会の展開と手工業生産』古代学研究会 pp.29-48
- 東影 悠 2020 「地域社会の展開と手工業生産—埴輪生産遺跡と集落・古墳の比較から—」『地域社会の展開と手工業生産』古代学研究会 pp.1-8
- 東松山市教育委員会 2003 『杉の木遺跡 (第 3 次)』
- ふじみ野市立大井郷土資料館 2020 『ふじみ野の古墳と埴輪—ハケ遺跡古墳群と埴輪—』ふじみ野市立大井郷土資料館 令和 2 年度企画展図録
- 増田逸朗 2002a 「埼玉政権の法量的分析」『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社 pp.171-202
- 増田逸朗 2002b 「埼玉政権と埴輪」『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社 pp.153-170
- 山崎 武 2004 「生出塚窯産埴輪の生産と供給について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター pp.231-235
- 山崎 武 2021 「生出塚埴輪窯産双脚人物埴輪について」『埴輪研究会誌』25 pp.1-18
- 若松良一 2021 『埴輪—研究法と解釈法—』ニューサイエンス社

#### 図表出典一覧

- 図 1 (埼玉県教育委員会 2018) p.104 第 54 図を改変して作成。
- 図 2 上：(埼玉県教育委員会 2020) p.266 第 135 図、下：(埼玉県教育委員会 2018) p.96 第 51 図を改変して作成。
- 図 3 上：(埼玉県教育委員会 2014) p.121 第 68 図・p.122 第 69 図・p.123 第 70 図・p.124 第 71 図、下：(埼玉県教育委員会 2020) p.203 第 107 図・p.204 第 108 図・p.207 第 111 図・p.208 第 112 図を改変して作成。
- 図 4 城倉撮影画像を基に作成。なお、刷毛目の写真に関しては、埼玉県立さきたま史跡の博物館（奥の山古墳・鉄砲山古墳出土埴輪はさきたま史跡の博物館保管、桜山窯出土埴輪は埼玉県教育委員会所有）、鴻巣市教育委員会（生出塚窯出土埴輪）より、掲載許可をいただいた。
- 図 5 (城倉 2011b) p.99 図 33、(埼玉県教育委員会 2014) p.74 第 48 図～p.77 第 51 図を改変して作成。
- 図 6 (城倉 2011b) p.103 図 36、(埼玉県教育委員会 2020) p.158 第 80 図～p.188 第 99 図を改変して作成。
- 図 7 (城倉 2011b) p.24 図 7・p.25 図 8・p.26 図 9 を改変して作成。
- 図 8 現在までの知見を基に作成。
- 図 9 (城倉 2011b) p.14 図 4 ①・p.16 図 4 ③・p.18 図 4 ⑤・p.19 図 4 ⑥、(鴻巣市教育委員会 1987) p.53 第 37 図、(熊谷市教育委員会編 2015) p.540 第 158 図、(山崎 2021) p.9 表 1 を改変して作成。なお、大境 6 号墳人物 7 の個体は、市史掲載個体の縮尺が誤っているため、(山崎 2021) p.15 註(5)の記載に基づき器高 124cm で提示した。
- 表 1・2 資料調査の成果を基に作成。